

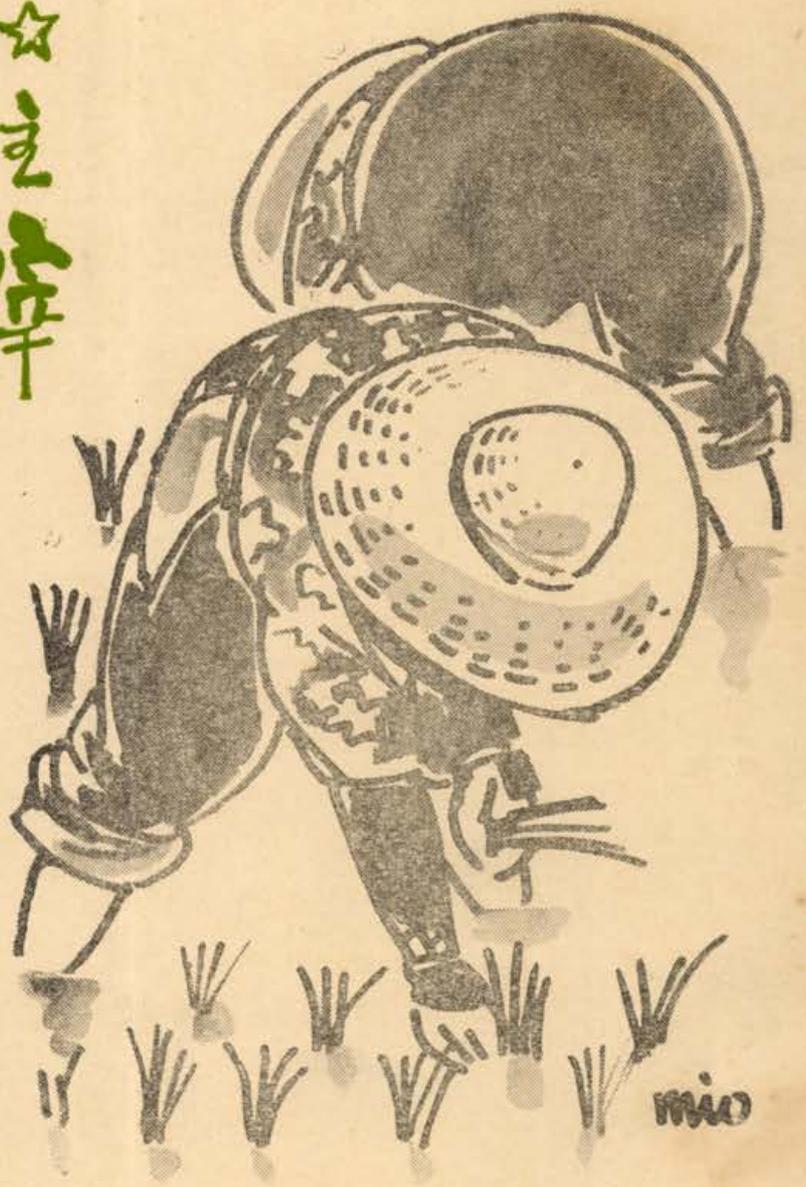
昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
創刊大正十三年・通卷三百十三号

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.313

麻生路郎☆主宰



六月號

川

柳

の

証

六月号目次

(昭和二十八年)

題字……………麻生 路郎
表紙……………米田三男之介

川犬と猫飼……………豆秋・喜由・瓜平
柳主座談會……………愛論・一瓢・梨里……………(四)
眼の散歩……………麻生 路郎……………(三)
句碑について……………安川久留美……………(三)
川柳と俳句の区別
に對する私見……………戸田 古方……………(二四)
旅 雜 音……………麻生 路郎……………(三四)
人間横丁(Ⅱ)……………東野 大八……………(三)
選に當つて……………永田六竜子……………(一八)
飛燕往来…………………………(二〇)
BK川柳の会…………………………(三五)

柱の黒板…………………………(三)

★

不朽洞句帖……………麻生 路郎……………(三)
川 柳 塔……………麻生路郎選……………(一)
同舟近詠……………諸 家……………(二)
近作柳櫛……………麻生路郎選……………(六)
一路集
「ピクニック」……………武部若菜選……………(三三)
「乳母車」……………麻生梨里選……………(三四)
各地柳壇…………………………(三六)
不朽洞会から…………………………(三三)
柳界展望…………………………(三四)
編集局にて…………………………(三〇)

本社六月句会

時―六月六日(土)午後六時
處―大阪市天王寺区下寺町二丁目
(市電下寺町・日本橋三電停前下車)

題―「私用」・「魚釣」・「傘」
於 光明寺

柳 評 話 麻生 路郎
水谷 鮎美

来会歓迎・鉛筆持参
川柳雜誌社句会部

青葉の会

日時 六月十四日(日)晴雨不論近鉄上六
駅九時集合
行先 枚岡―生駒山上(行程約四キロ)
雨天の場合は生駒山上直通
兼題 「ブランコ」 麻生 路郎選
「巻ずし」 中島生々庵選
席題 当日発表
会費 (五十円交通費自弁、弁当持参)
呈賞 各題天位
幹事 水堂、香林、紫香、しげを、ゆづる、圭三、牛歩
摩太郎、淡舟、文鏡、梅里、負山、浪花、一瓢、
清淵、白柳子、水客、青丹子、恒明、三司、博也
夢澤、春風、胡蝶、國雪、没堂子、芳的、竹莊



不朽洞句帖

麻生路郎

別府行

浪の音ばかり 船は別府をさしてゆく

かくてたそがれぬ 淡路島没したり

茶柱の立つもうれしい船の旅

別府銀座大阪弁の人に会い

みち足れる人へあふれる別府の湯

思ひ出の亀の井

三十余年後に懐う熊八の掌がた

油屋熊八の別府でもあつた

亀の井に武子燦子の若かりき

亀の井の浴衣に恋のつれなくも

生々麻母堂を思ふ

一周忌雲をどうしてなつかしむ

赤坂町にて

横丁は麦の青さの目立つとこ

柳川 狸と猫の飼主睦談會

語る人

須崎豆秋・大鶴喜由・種瓜平・眞鍋一瓢・森下愛論・麻生梨里

豆秋「メンバーが揃いましたから早速始める事にいたしました。今日は犬と猫の飼主に集つて頂いたのですが、犬や猫は動物の中でも最も生活に身近かなせいもあつて、川柳にも沢山名吟佳句が見られるようです。一つ川柳を通じて、我が愛犬、我が愛猫を語つて頂きたい。僕は昔から犬も猫も随分飼いましたが、此の間猫が死んでまだ喪中です。(笑声)」

春の夜が更けるよ猫の北枕 僕の淋しい心境です。処で大阪に犬が九万匹、猫の数は知りませんが、同数とみて二軒か三軒目に犬か猫が飼つてあると云う状態です。 梨里「飼つてみれば犬も猫も可愛いのでしょうか、大体に於て猫の方は猫が好きで飼うと云うよりも鼠が多いからと云う理由で飼う人も可成あるのじやないかと思えますね。 一瓢「猫を飼うか、犬を飼うか」と云う点では、其処に経済的觀念も多少影響すると思ひます。例えばですね、此の間家の子供が犬を拾つて来たのですが、家内の曰く「猫の食糧は極微々たるもので済むが犬は拾つて来た子供よりよけいに食べる」(笑声)と云うのです。子供のためには飼つてやりたいのだけれども、まあ「元の所へ捨てて貰う方がよからう(笑声)」と云うので、また元の処へ捨てて行つたんです。

千円です。副食は骨だからあんまり掛らん。 梨里「うちはその骨があんまりありません。 愛論「骨だけと云う訳には行きませんで……。 瓜平「自分の体は骨だらけだが犬や猫にやる骨はない。(笑声) 私は飲み屋で自分の喰つたやつを貰つて犬の手足産に骨を持つて帰つてやるんです。私は酔うとよく犬でも猫でも無茶苦茶に拾つてくるんですが、可哀相で、そんな経済なんか考えてもられません。捨てる人はもう少し一人歩きが出来ると云うか、そればかりの捨てるのは可哀そうですね。だから拾つて来て一瓢「一人歩きが出来る様になつたら捨て、も帰つて来るからでしょう。 瓜平「此の間も堂島河の処で水面を見ていると何か白い様

なもの河の表面にうじやうじや動いているのです。よく見ると猫の仔なんです。ボール箱か何かに入れて河へ捨てたんでしよう跳きながら引つ込んだり浮び上つたりして段々沈んで行つてしまいましたが、同じ捨てるにしても殺生な捨てる方もあるものだと思つて、實際義憤を感じますね。 豆秋「捨てられるのは犬より猫の方が多いですね。 犬の子を産れぬ先に貰い受け (瑞川) と云う句がありますが、それが猫になると 捨てられた猫の子二匹雨が降り (右近) 捨て、来た猫のあわれが目に残り (久米女) 猫の方は「猫の子あげます」とか、捨て猫などがよくあります。近頃はこう云う可哀な事をせぬ様に獣医の方で避妊手術が出来ると云うので

瓜平「高うつきますやろ。人間でさえ出来ないのにねえ。(笑声) 豆秋「近頃獣医はぼろいそうですね。税金も人間の医者より高いのだそうですね。 瓜平「何しろ金持相手やからね。 貧乏な主人へ犬も従いて生き (勝) 親方はルンペンだとは知らぬ犬 (草々) と云う句があるが、先日心斎橋を歩いていたらルンペンが籠を背負つてその上に犬をちよこんと乗せて、流行歌が何か唄いながら歩いていてのを見掛けましたが、その点金持の犬になると 諦めて子犬は紐の長さを寝 (志津) と云う工合に繋がれて自由に歩くことも出来ない。犬にしてみれば金持の犬よりルンペンの犬の方が幸福じやないかと思ふ。 豆秋「そりやそうですね。 瓜平「此の間何かに日本人が動物を可愛がらないのは日本人の欠点だと云う様な事が書いてあつたが、動物を可愛がると云うのは情が深いのですね。 梨里「何でも飼つていると可

愛くなるものですよ。家の近所に鶏を飼っている人があるんですが、その人なんか一人で鶏を見ていて一寸も退屈しないんですね。今鶏が欠伸をしたとか満腹してるとか色んな事を云つて喜んでるんです。けどその人の云うのに猫なんか卵も生まへんし、食べるばかりやから損だつて云うんです。そんな処で女つて打算的なんですね。

愛論Ⅱ犬も猫も好きだが犬は飼おうとは思いませんね。猫やつたら何匹でも飼うけど、豆秋Ⅱ豊中に猫五十四飼うていた人が、ありましたなあ。愛論Ⅱそう〜新聞に出てました。飼うてるのが五十四で位牌が二百もある。その線香の火で火事がいつて主人も猫も焼け死んでしまったので奥さんが尼になつたと云う話がありました。

一瓢Ⅱそんなに沢山居たら名前呼んでわかるかな。瓜平Ⅱそりやあそこ〜わかりまつせ(笑)私は豚を飼つてましたが、馴れるとやつぱりそれ〜顔も違うしね。それが猫やつたら毛並も違うしね。梨里Ⅱそれは人間の方から見ででしょう。猫の方は自分が

何んで名かわからないでしよう。うちなんかたつた二匹だけれど覚えません。一日中悪いことばかりするので年中「コラツ、コラツ」云つて叱るので「コラ」と云う名前かと思つていろいろか、でしようか、「コラ」云うたらよう知つてますけど、名前みたいなんん呼んだかて知らん顔してますわ。愛論Ⅱそらあかん、うちはやつぱり「タ〜」云うたら大きい方、「フク」云うたら子供の方が顔上げて返事しまつせ。僕の句に

人間の言葉で猫も叱られる
 というのがありますが、人間の言葉が猫にわかるかどうか
 梨里Ⅱ表情でわかるのでしよう。何んで叱られてるかわからんけれども、言葉が荒いとか何か叱られてると云う事は



豆秋Ⅱそら、わしやつたらもつと上手に吹くのにと思つて(笑)犬は確かに音はわかるのでしような。ピクターのマークにも書いてある。一瓢Ⅱ猫でも雷の音やか大きな音がすると、びつくりしてしよげてますよ。豆秋Ⅱレコードで猫が踊ると云うような事を云いますが、瓜平Ⅱおけさ節でね……。愛論Ⅱ猫が化けると云うような事を云いますが本当ですか。瓜平Ⅱいや、あれは人間の方で化かされるんですよ。豆秋Ⅱ有馬猫とか鍋島騒動とか猫が化けた話はよくあるが、やつぱり人間の方でそんな氣持になるのでしような。喜由Ⅱ猫は夜なんか暗闇の中でも眼が光るし何となく隠険だから化けるような氣がするのでしよう。僕は犬を飼つているが犬はその点陽性ですよ。猫でも蛇でもあ〜云う陰性のもは化けるように思うのですな。

梨里Ⅱ猫はズルイですよ。エゴイストですね。自分の思うようにしかしなない。瓜平Ⅱ猫の分と犬の分と二つのおわんに御飯を入れてやるんですが、猫は犬の御飯を先に食べる兎に角、狡猾ですよ。梨里Ⅱうちでも二匹に御飯をやるんですが、前足で相手の頭を叩くんです。それでお皿を別にしたんですが、早く食べて相手の分を食べてやろうと思つたんですね。横目で相手のお皿を睨みながら慌て、食べるのですよ。瓜平Ⅱ他所の花は赤いと云いますが、他人のものは美味しと思つたんですね。うちの犬に御飯をやる隣りの犬が来て食べてしまつたんです。自分の家のものは食べない。隣の家の人はそんな事知らんものだから「うちの犬は贅沢だ」と云つてるんですよ(笑)喜由Ⅱ喜由さんは名犬を飼つていられるそうですね。

喜由Ⅱセバートです。生後一ヶ月位ので五千円でした。名犬は戀の自由も許されず血統がどうのこうのと犬のこと(旭堂)

という句がありますが、血統を護つて行くためには禪をすゝめるわけにも行かず、結局つないでおくより仕方がないので。犬の血統証を受けるのに千円位かゝります。豆秋Ⅱ人間の戸籍抄本よりも

人間の言葉で猫も叱られる
 というのがありますが、人間の言葉が猫にわかるかどうか
 梨里Ⅱ表情でわかるのでしよう。何んで叱られてるかわからんけれども、言葉が荒いとか何か叱られてると云う事は

余程高いですな。

喜由Ⅱ犬はよくヂステンパーにかゝるんですが、この血清注射は原價千円です。ヂステンパーは和犬は侵されにくいのですが、洋犬は弱いんです。大抵の人は健康なときには可愛がりますが、皮膚病をしたり、血便が出たりすると医者にかげずに捨て、こうう。それに肺炎だとか、こうした病氣の原因は蛔蟲がわいて腸壁を破つたりして微菌が体内を廻るのです。だから病氣の予防として、毎月一回虫下しを飲ましてやることです。虫下しには「チモール」か「カマラ」などがよろしいでしょう。そうすれば犬の健康は保てます。

豆秋Ⅱ僕とこは石切さんに語つた。(笑声)

石切さんがヂステンパーもたのまれる (豆秋)

と云うのが、その時の句ですが、やはり死にました。

瓜平Ⅱ僕とこは石切やから電車賃がいらん。

豆秋Ⅱ然しヂステンパーはあさまへん。(笑声) 専門外やから……。

一瓢Ⅱ何の神さんですか。

豆秋Ⅱデンボの神さんです。

喜由Ⅱ皮膚病には〇・五プロ

のアクリフラピン液を塗るのが一番よろしいが、ならぬうちに、用心しなければいけません。その原因は先程申しました様に蛔蟲のためとか、又は蚤をわかすと搔ゆいのでかいた処の傷が原因になつたりするのです。だから蚤を退治してやらねばいけません。D D T三瓶位を体に摺込んでやるか、それよりもハウスの薬の下に、D D Tを撒く方がよいでしょう。体にD D Tを沢山撒くと舐めますからいけません。

瓜平Ⅱ腐つた魚を食べると皮膚病になると云うような事をさいていますが、喜由Ⅱよく塵箱をあさつたりする犬などが、糞つたりします。先ず家庭ではみすく腐つた魚を與えるような事もないでしょう。

瓜平Ⅱ皮膚病になつたら毛生え薬を塗つたらどうかな。(笑声)

豆秋Ⅱそんな薬やつたら犬より先にこつちがつける。

(笑声)

喜由Ⅱ僕は結婚してから犬を飼つていなかつたのは、空襲後の一年間位でした。

梨里Ⅱそれだつたら戦争中は食糧に随分困られたでしょ

う。

喜由Ⅱそうです。

代用食しても犬飼う未亡人

(辭月)

と云う句がありますが、私は代用食どころではありませぬ。人間でさえも配給量では足りないのに犬の分の配給がないのですからね。朝暗いうちから起きて労働者の様な風采をして労働者にまじつて並んで外で食べましたそれで私の分を犬にやるのです。豆秋Ⅱそれは大変苦勞されたわけですね。犬は随分食べますからね。

喜由Ⅱそれも飼い方ですよ。お粥にしてやると一日一合位で済みます。かしわの臟腑と野菜を入れて味噌位で味をつけて、ぐつぐつと炊くのです。その方が犬の体のためにもよいのです。犬は満腹感を得るために沢山食べるのですから普通の御飯で満腹するまで食べさせると体に悪いのです。それともう一つ、何時も食物の傍らに必ず水を入れておくことです。夏期はことに炎天で水分をさらされて病氣に罹る場合があるので。

瓜平Ⅱ犬は利殖になりませんか。

喜由Ⅱ素人はかえつて損をし

ますね。仔犬一匹を犬屋が五千円に賣るとしてこちらが賣るとすれば血統証を添えて三千円位ですから、六匹生まれるとして一万八千円です。そのうち交尾料が一万円位で血統証が一匹二千円ですが、一ヶ月位は飼わなくてはなりませんから、ミルク代や何かを要りますので結局損です。それで六ヶ月位飼うと犬の訓練をするのですが、一週二回ずつ訓練に來て貰つて一ヶ月一万円の訓練料が要ります。それでやつと一人前の犬になる訳です。

梨里Ⅱその訓練ほどの位の期間するのですか。

喜由Ⅱ犬の智能程度にもよりますが、大体二ヶ月位です。梨里Ⅱ一人前になると、どの位の値になります。

喜由Ⅱ三十万から五十万位ですが、只訓練を受けただけでは駄目なんです。それで犬の品評会え持つて行つて、賞状を貰つて初めて値打ちが出るのです。連れて行くにしても自動車で連れて行かんなら見せんならん。(笑声) 高級車に乗つてね。

瓜平Ⅱ獵犬が一番高いのですか。

喜由Ⅱ警察犬が一番高いのです。セバートですね。

豆秋Ⅱ品評会と云うのは闘犬大会などは違うのですね。喜由Ⅱ違います。あれは土佐犬です。喧嘩させるのですが、我々が喧嘩すると思えば、何か吠えるように思いますが、黙つて喧嘩するのです。先に「キヤン」と云うた方が負けです。

梨里Ⅱ鳴いた方が負けだと云うことを犬が知つているんですか。

喜由Ⅱそう云うように訓練するのです。豆秋Ⅱ大麥犬に就いて御參考になるお話を聞かせて頂きましたが、犬はこれ位にして、愛論さんは猫を七匹も飼つて居られたそうですね。愛論Ⅱ僕は仔猫が生まれても捨てずに皆飼つてやろうと思つてね。猫のお産の時にも、僕が世話してやりますね。お腹をさすつてやると大抵何匹生れるかわかります。

一瓢Ⅱそうですか。うちも診て貰おうか知らん。愛論Ⅱ仔猫が生れると乳を吸つている間は親が小便など舐めてしまします。一寸でも乳以外のものを食べる様になる。ともう便の始末はしません。

それから鼠に噛まれた時には猫のよだれをつけるにすぐ治るそうです。猫の病氣にはマタタビが効きます。それに猫はマタタビが好きで、箆笥の奥などにしまつて置いて何時の間にか探して食べる位です。

瓜平 僕とこの猫はマタタビは食べませんよ。

豆秋 所りやあ性質やな。うちの猫は鼠さえ喰わん。

(笑声)

喜由 馬タタビを食べない猫にはパンクレアチンを食べさせたいんです。

瓜平 猫はよく草を食べますが、あれも猫の習性と云うのか、悪いものを食べたときなど、あつして勝手に治すのですね。だからどの草でも食べるかと云うとそうじやない。禾本科植物を食べるので

梨里 猫の習性と云えばね猫は人がものを食べている時に限つてぶるゝと身震いして体を搔くでしょう。どうしてか知ら、何か欲しいと思つてゝのに呉れないと体がむずむずして来るのかしら。

箸動く通りに猫の首動く

(霞乃)

と云う句がありますが、満腹

してゝもそうですね。

愛論 そうですね、僕らもな

いむすゝするまで辛抱さした事ない(笑声)僕は猫と同じお茶碗で食べますね。僕が食べて猫に食べさせて又僕が食べる。それでも何ともない。

瓜平 私は大と一緒に酒飲むんです。焼酎なんか、なんぼでも飲みますよ。

梨里 酔うでしょう。

瓜平 さあ、犬の酔うたのは知らん。初めから四ツん這いになつてゝるから僕よりしつかりしている。(笑声)

豆秋 猫や犬は飼い主に似て来ますね。

瓜平 豆秋さんこの猫は頭光つて来ますやろ。

豆秋 所りや皮膚病や(笑声)顔見たらこの猫は何処の猫だと云うことがわかります。

一瓢 そんなこと云うたら、うちの家内おこる、うちの家内は色が黒いから。

梨里 一瓢さんの句で、

けなげにも猫猫なみのみだしなみ

と云うのがありますが面白い句ですね。

瓜平 人間はすぐ人間の頭でものを考えるのですよ。この句だつてそうですかね。それ

がみだしなみだと思ふのは人間ですね。

梨里 「みだしなみ」と云う

観方が面白いと思ふのですよ。私だつたらね。食事の後で唾液が出て困るので体になすくつてゝるのだと思ふのです。

豆秋 然し猫は犬より確かにみだしなみがよい。

犬のやつお地蔵さんへ足を

あげ

と云う句があるように、犬は大抵電柱とか何かに用を足すが、その点猫は潔癖です。ちやんと用を足した後は砂をかぶせて綺麗にします。

瓜平 上へ上るときでも教えればちやんと雑布で足を拭きますよ。

豆秋 うちの上るときに「ニヤーニヤー」鳴いて拭いてくれと云います。扱て雑音が多いので筆者も困ることだらうと思ひます。処で犬や猫の名のことですが、何処でも相

当に頭を捻るらしく川柳にも

犬の名も家族会議で決めて

ます

子を持つて近所の犬の名を

覚え

どんな名で呼んでも犬の尾が動き

皆さんのお宅ではどんな名をつけて居られますか。

瓜平 ポチです犬は子供が付けたので割合平凡な名が付いているんです猫はチャコスケ

豆秋 ほう。やつぱり瓜平さんらしいな。

瓜平 以前に飼つてた猫は両

耳へかけて八の字形と鼻の頭にちよんとしたぶちがあるの

でチヨボハチと云う名をつけてあつたが、「チヨボハチ」と云つて呼ぶとやつぱりやつて来よつた。(笑声)

豆秋 お宅のロミオとヂュリエットは誰が付けたんですか?

梨里 それこそ家族会議で決めた名ですよ。雄と雌と二匹だからと云うので何かそう云つた一対の名にしてやろうと思つて色々考えたんです。お

染久松やら、ダグウッドとブロンディやら、シーザーとクレオパトラやら、色んな名前

が出て来てしまいに「てんやわんや」にしようかと云う案も出てたんですが、どれも呼びにくくもありもう一つ感心しない。最後にこのロミオとヂュリエットと云う誠にロマ

ンティックな名に決まつた訳です。処が所詮猫ですから駄

目です。ロマンティックな処か食べる事と寝る事しか考えていません。

喰ちや寝喰ちや寝猫も暑い

です

(豆秋)

と云う句がありますが、うちのロミオとヂュリエットも普通の猫と何等変りがありませんね。

愛論 うちには「フク」と「トク」です。

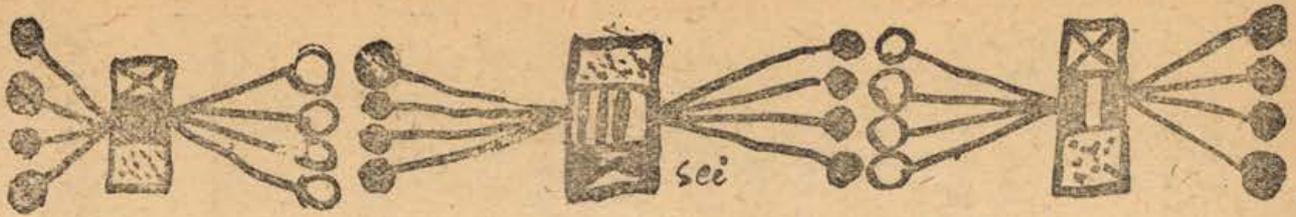
一瓢 フクトク貯金やな。

豆秋 僕とこの犬はよう死ぬので、何でも強い名を付けようと思つて、その頃朝日新聞の小説に物凄く強い「我馬造」と云う海賊があつたのでその名を貰つた。警察え届けに行つて「我馬造」だと云うと「へえーガマゾウ？」と巡査が変な顔をして何べんも聞き返しよつた。しかし折角強い名をつけたけれどもやつぱりヂステンパーで死んでしまいました。

喜由 米國の拳闘家にタニと云うのがあつて、この名を付けた処が、あまり大きくなつて家の玄関一つばいになつたので他所へやつてしまひました。朝でもちやんと新聞を

くわえて来ますよ。

豆秋 ではこれ位で……。(没食子・梨里筆記)



池田市 戸田古方

皇太子の横にいるのが邪魔しそ

温泉の賀状が来てたこともあり

こんな僕でもけむたいという息子

尼崎市 水谷鮎美

生返事明日からよその子となる身

陽だまりの猫を写生の子が見つ

陽だまりの恋愛至上論もよし

洗濯の泡つけたまゝ初対面

盲判秘書に聞くこと多かりき

横浜市 福田山雨楼

解散の嵐何やら小気味よし

忙しい妻種ジャガを植えに行く

引揚げに肺患多く胸つまる

帰国船で一人生れたのもニュース

家と職下船を前に駄々をこね

おんぶして貰う元氣もなく棄権

大物が落ちた話でのんでいる

ホノルル市 内藤草一郎

それからの逢瀬はけちになつて行き

もう矢玉盡きるに妓まだ落ちづ

行く処まで行くわと酌ぎこぼし

パトロンが何さどマダム酔ふて居り

人並になれたが若さ枯らしてた

不足ない妻はシングで花を切り

不精髭恋がしたいと笑わせる

バ、と名が変る産院から電話

結局は女將詰め手を委せられ

ホノルル市 白砂旋風

損になることが分れば平和来る

人の運今夜は棺に寝て御座る

聴く丈は良く聴く人で当選し

大阪市 須崎豆秋

迷い児が居眠りをしている櫻

犬猫の病院さへもあるものを

大阪市 正本水客

句のなかにうすもれ路郎という姿

大学のノートでちりを拂ろて掛け

お見舞に来て見舞など云はず去に

妻の子夫の子をして二人の子

家庭の平和にはとりが居る

女だん／＼に家を建て増す願ひのみ

毛糸置いて妻も若やぐことを云ひ

中学を出た子ヘカメラ貸してやり

大阪市 丸尾潮花

うつむけば瞳にさみしさのにじむひと

春雨の須磨へ観光バスが着き

強盗に弱味を見せず記事になり

耐組の声が大きい花の下

大阪市 北川春巢

雨の銀座旅人らしく傘を持ち

歌舞伎座はどこと尋ねててれくさし

あこがれて来た東京もパチンコ屋

東京出張(三句)

高田市 尾崎方正

特價品お隣が見えるシャツを買い

雑草に教へて貰う生きる道

かす／＼の場面を踏んで黙るのみ

イヤリング揺れます／＼多弁なり

言ひ寄れば風船玉のやうに逃げ

大阪市の清水白柳子

飯の社務所で鳩の巢もなく

奏樂に二十の扉めいた音

直線の素直さ伊勢の御神社

無神論親の残した財を持ち

花の雨電車ではやく許り也

当直に大工自轉車借りられる

大阪市の武部香林

重役は眼鏡忘れて淋しがり

ぶら下る吊皮にまで飲めどあり

五十才に垂々として嫁にゆき

ターミナル働く足と遊ぶ足

岡山市 大森風來子

トラックの上の婦人は全国区

釣舟の客人らしく酔ふており

鳥取市 杉谷湖山

噂々と説けばうなだる子の愛とし

大股に春逃がさじどハイヒール

かつしりと重い財布の頃思ふ

炊しぐ煙一筋山に忘れられ

比佐良画く絵に似し娘咳き止まず

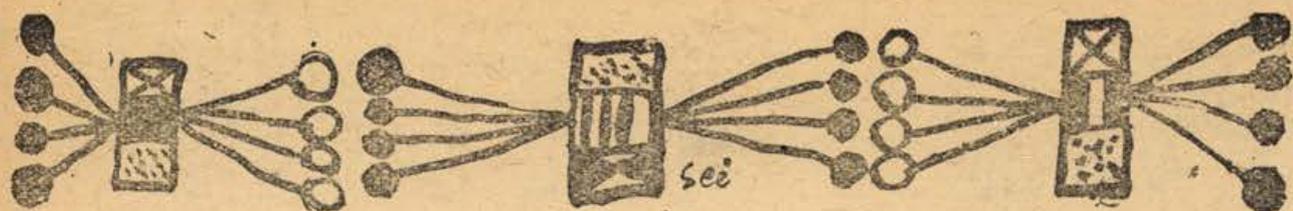
下関市 國弘半休門

蔭口を聞き飽いた猫膝を降り

地下足袋で来る銀行の預金帳

大阪市の吉田斜水

氣持だけと云うには過ぎた贈り物



酔顔へ女正氣で追つてくる

大阪市 山口秋花

見通しもつかず議員になりたがり

吹田市 野本香水

奥さんも社交家雑草の庭となり

滞納はしてもすつぱり青疊

定見をすて左遷にもこだわらず

尼崎市 小林文月

婦警にも嫁くべき春が訪れる

婦警を貰わんかと言われ一寸てれ

駐留軍どれも小さな女つれ

終戦八年まだモク拾ふ人の居て

女集金コーヒーのんで便所借り

大阪市 富岡淡舟

酔ふて来た父を末つ子だけ案じ

むつかしき世なり酒呑もかと思ひ

二男幼稚園入園

三時間ほど静かなる我家なり

アベツクを春の霞がたれこめて

心得て男一泊すゝめに來

うぐひすを出湯に浸りきゝ惚れる

山口県 長野井蛙

割勘と知らず下座へかしこまり

どん尻で入学やつと張り出され

一間ぎり掃くにも新妻禰がけ

京都府 間嶋青丹子

中傷をされても好きな人は好き

滝の音が空虚な胸にひびいて來

投票へ行く手に子供ぶら下り

大阪市 上田春柳

欠伸かみ殺して春のお葬式

言ふまいと思へど妻へついはやき

岡山県 直原七面山

名も知らぬ町へ二人は馳落ちし

石塔を賣り人生の底を行く

ウイソクを男アベツクの目で迎え

相談欄受持女史に暗い過去

イヤリングダンスホールの灯をはちき

十二月金のあるのへ惚れ直し

レコードが飲めくくくとはやし立て

世話役にされてお酒が身に付かず

春うらゝ恋の奴かそれもよし

我が恋は葉末の露にさも似たり

家柄を後光のように大事がり

橋渡しの男の方を女恋ひ

膝枕の男の鼻をつまんで見

螢狩りで抱擁してゐるのに出会ひ

拗ねられへ又拗ね返す若き恋

クイツクスローく晦だと言ふに

良田をつぶして映画館が立ち

宇部市 上林粗影

寶石の一边金になりたがり

万年青 鉢守衛とやらを二十年

酔ふ程に飲む程に花見酒は社会党

落籍された噂花見でツンと逢ひ

つばくろよ今年は老母は亡つた

火遊びの果を旅館の仲居はん

兵庫縣 家沢斉花

街の端まで来てしてもた貸浴衣

選挙よりゆつくり寝たいだけとなり

東京都 藤本満年

地下室は造花の櫻まつりなり

お徳用というので財布はたきけり

受像器へコーヒー一ぱいねばるなり

同宿をみんな妬かして婚約し

熊本県 西口如川

惚れたとは書かず日記の自己弁護

座布団の厚味旦那が敷くらしい

椅子があく迄の大公望と決め

岡山県 福島鉄兒

仲人の言つた月給とは違ひ

落花狼藉とは空瓶を振り上げて

東京都 藤本茶々

巻すしを切りそこなつた味をきく

涙ぐんでいるのに嫌味まだ続き

大阪市 塩浜一路

春がすみ古城の姿見直され

母ちやんは留守かい！ランドセルを放り

大阪市 西いわを

早帰り夫を父へ委しとき

社長ともなれば社員の顔しらす

岡山市 服部十九平

先生の娘を貰つて恐妻家

棄権する自由が欲しい総選挙

肺を病む娼婦がバイブルなどを読み

岡山県 大森娛句樂

溝と云ふ溝皆春の水たゝえ

兵庫縣 若林草右

借金を残して黒袴二段ぬき



お医者はんが病氣でつかど見舞客

大阪市 足立 春雄

先生と言われ偽善をくり返し

三遷どこか基地の長尾の権利金

銀行と聞いて声まで女將姿へ

馬車馬の如く彼女は老ひにけり

背廣着た手代でもあり道修町

さかづきを持つたも知らぬ程に酔ひ

手を叩く唄ちやないのか座が白け

美しい嘘の涙を拭かれて居

倦怠期と言われたくない隠しよう

うまいもの喰べさせなさいへ涙ぐみ

本買えど貰つた金の使いみち

年頃の姪に小遣又とられ

これからはどこを真似るか日本人

手加減をしてゐる母を子は知らず

補回戦勝つた方から先に泣き

九官鳥自分の声がほしくなり

神頼みする氣で居つて落ちつかず

暴落も嬉しからずや平和來

逢えなんだのも良いかも知れぬ御互に

病むベツト梅も櫻も散り果てる

知らぬ間に女も作り子も作り

大阪府 山本 葉光

大阪府 山本 葉光

大阪府 山本 葉光

汗ふいて公私多忙が笑わせる

嬉しさの晚酌妻にも子にも酌ぎ

氣をつかい狭い玄関の花を褒め

綺羅を纏い憂うつそうな顔で居る

酒屋さんバーで一杯やつて居る

近よらずさわらず他人の喧嘩見る

ボンと胸たゝいて見たが自信なし

長谷川のロケで瓦を踏みわられ

インテリの床屋で町の録音機

歟の柄にあごをのせとる春霞

妄想を拂ふミシンの急調子

一家みなマージャン狂にした後妻

倦怠期理想の夫になぐられた

酔漢に婦警はたゞの女なり

投書してやるとおどしてそれつきり

手土産をくさしながらに食べている

衿白粉今日は酔はして見たい妻

人間の弱さへ当て込むパチンコ屋

客筋をほめて仕立屋腕をぶし

貧乏が板についてるふところ手

妻と子を連れた花見は酔い切れず

政見に殴り合うとは書いてなし

素氣ないふりへ心はなほひかれ

熊本市 花岡 英子

熊本市 花岡 英子

熊本市 花岡 英子

恋同志別な顔して仕事をし

電車から貴方の事務所見て通り

病人へおつきあひする仕立物

呉服店ごまかす様に尺早し

黙々と産みも産んだり五男五女

目を配り心を配り肩が凝り

もうねよと言ふに針をさがしてよ

刑務所へ行かずに済んだ霊柩車

來る人もなく墓石に散る櫻

エ、サツサーあれちや長生される筈

商品の肌が夜霧を吸ふている

メンソレとは妻も色氣のない匂ひ

退院をされて看護婦逢いにゆき

役得の椅子へ社長の婚がかけ

卒業の右総代は二号の子

賣るのかいと聞きたいほどの閑な店

全快の仕始め庭の草を引き

メガホンがひゞいて氷裏ゆれ止まず

齒ブラシをくわえて揚げるこいのぼり

没落のきざしは額に塵があり

問題を起して一升では済まず

女房の尻でズボンの押しを切り

倉庫番先輩ですと言ひ瀝り

勘当をさせた妓の氣が変り

岡山市 坂井 三葉

岡山市 坂井 三葉

岡山市 坂井 三葉

堺市 八木 摩天郎

高槻市 福田 丁路

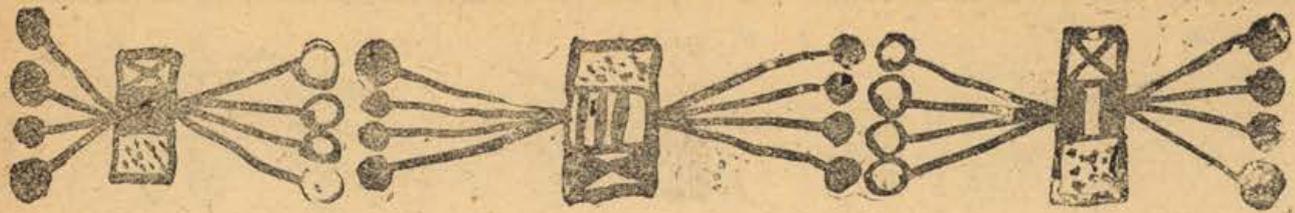
水谷 谷水

田村 藤波

岡田 夜潮

阪井 三葉

坂井 三葉



岡山県 政田 大介

ストックの倉庫を見つめた金詰り

口惜しいが結局二号の子を育て

警棒へ密造部落殺氣立ち

俺に似た朝寝の癖を叱りかね

路郎師を大介居に迎へて

柳談が佳境に入つて爛が冷え

大阪府 青柳 扇子仙

ぬけぬけと関係語る未亡人

三亀松と三門博がお氣に入り

收賄のそれから酒も口にせず

かけ出しのツラサぐるぐるサツ廻り

かけ出しへ整理部長はとりあわず

真夜中のスクープ政治記事となり

茨木市 下山 清潮

我が意志を尊重し過ぎ嫁きおくれ

落選を目当の様な議員が出

岡山県 本田 恵二朗

折れるのが恥でないこと見つけ出し

ついそこえ行くよな顔で羽田立ち

木の芽どきふと誘惑を期待させ

大阪市 眞鍋 一瓢

うたゝねを叱る妓は女房じみ

馬車馬に似て居て戸籍筆頭者

あり合せですますしつけの子のぬりえ

無限責任社長となりし未亡人
うかつにも妻が好みの柄をほめ

大阪市 永田 六龍子

失業の芝生で募集欄を見る

夢未だ醒めず祇園の灯に座り

選挙戦こゝ当分の義理を欠き

綻びた櫻に手が鳴り靴が鳴る

恋愛を知らぬ上役にも困り

事務的に話す女の冷たさよ

根くらべ買ふまで坊や泣く氣なり

鳥取市 日置 文 笑

九つで母に死なれた女給さん

マニキュアの手で灸すえる父の背に

もうそれで良いと鏡は言ひたそう

鉢を買ふまだ退院はせぬ心算

恋人の父嚴格な人と知り

あの店はうどんがまづいので覚え

中傷をかみ殺して顔ゆがみ

日曜に来る電報は会社から

京都弁でやんわりのろけ聞かされる

生き抜いて来てこそと妻を責め

古い古いセピアの写真なりしかな

蓄めてゐる顔は一人も見当らず

閉店へ地階賣場は盛り直し

子の寝顔来年は買ふ鯉のぼり

ボーイフレンドもうネクタイを贈る仲

鳥取市 森本 法泉子

岡山県 井野 格 一

大阪府 小池 しげお

同島近詠

お色氣を見せない朝の女秘書

理くつではなし天皇がお手を振る

靈媒へそこらの風の引緊り

船酔へ豪傑背骨抜かれたり

政治家も政治屋も居て舞台もめ

春の汗ノーネツタイで母とあい

太閤記の如く英治は世に出たり

もう夏の猿又妻のいそがしさ

大原女の手紙へ京の春の風

死んでから日本の学者騒がれる

灸すえることにきめたが廿日たち

松山市 前田 伍健

金沢市 安川 久留美

東京府 富士野 鞍馬

たつぷり
震隔たつぷり
B₁ たつぷり

疲労と脚氣に

タタホリン

錠・任・無糖注

ヤミに形式にこだわるとマンネリズムな作品しか創れないことになつて藝術性が稀薄になつたり、喪失されたりする。時に形式を無視した作品に藝術性の躍動が見られるのも周知の事実だ。しかしながら、これは天才にしてはじめてなし得るところであつて、多くの作品は何処までも形式の範囲内で最大の効果を収めるより外に手はないようだ。私は極端なフオマリズム論者ではないが、卵の殻の形式によつて卵の名があることを思わされるものである。しかしながらその卵の殻によつて包まれた内容の良否については別問題である。卵の殻がいかに美しかろうとも、その内容が腐敗しないまでも悪質であれば、卵としての生命がないように、内容そのものが貧弱であつてはお話にならないからである。

喋べらなかつた

ある同業者のリクリエーションに招かれ、どつかで機を見て話をしたいと云うことであつた。朝七時すぎに、観光バス五台で大阪をあとに、十六号線を快速で南行した。つづじの淡輪、深日港から友ヶ島、それから加太、新和歌浦、観潮遊園、最後が海南市の温山荘と云う行程で全く息もつけない快速調であつた。そして温山荘へ着いたの

が黄昏れに近かつた。一行は名園を散策するどころか、お座敷を拜借して夕餐に忙しかつた。夕食が済むとすぐに、パタパタとバスに乗り込んだ一行が大阪にたどりついたのは十時を過ぎていた。私は松竹座の近くで、降車した。これでリクリエーションは終つた訳であるが、一読されても判るようには、どこでユックリすると云う時間のない、実に盛り沢山な名所早廻り競争であつた。誰が考えても悠に三行程のブロである。ここはど左様に幹事役の苦心にはなみならずぬものがあつたのであるが、結果から云えば碌に観るものも観ずに、息せき切つて、走つて行つて走つて歸つたと云うことになつていゝ。幹事役としてはこの会の参加者が余裕のある階級だけに前述の行程の三分の二位は會遊地であるに違いないと考へせめて一夕所でも未知の所へ案内したいと云う心づかいからであつたらしい。そしていささか無理だとは知りながらも斯うしたブロの編成をされたのであると思われ。單にそこを通過したと云うに過ぎない行き方が、どれほど心を楽しませるものであるかどうかは疑問である。折角出かけたのであるから、せめてその地方の風俗人情の一端にでも触れて来る機会が與えられたいものである。そして少し位の道草があつてもよいのではないかと私は思う。こゝで私は句会のやり方に

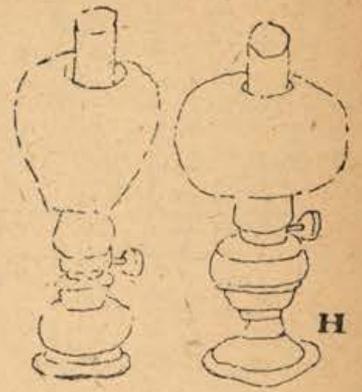
ついて述べて見たい。近ごろの句会の多くが、前述のリクリエーションのブロ編成に、どつか似ているように思えるのである。大たい句会と云うものは特殊の場合をのぞいては、みつちりと作句し、句の良否などについて、先輩に質したりするのが最良の方法ではないかと思ふ。もしそうだとすれば課題などもなるべく少ない方がいゝのである。ところが幹事役としてはなるべく多くの題を課し、一人でも一人でも多くの選者の顔を立てようと思ふ。それでもまだ足らぬと云うので何か特別な方法で更に盛り沢山なブロを編成して参會者を飽きさせまいと心がける。その志たや寔に善しと云いたいが、その結果はお祭り騒ぎのようなど思いもよらず、折角の幹事の苦心も酬いらぬことが多い。單に多くの人達を集めるばかりが能でもないのだ、このことについては句会の幹事役の一考を煩わしたいものである、と同時に参會者も幹事の苦心を買つて幹事の同調もされたいものである。前述のリクリエーションに參加した私は従來に体験したことのない感懐を得たのでここに告白しておきたい。それは前述のような急行行程であつたために、話をすべく招かれた私は、会員と同様に、觀光を満喫させてもらひ、御馳

走を頂戴したに過ぎない結果を招來したのであつた。甚だ有難いことには違ひないが、遂に一言も喋べらなかつたのである。(機会が無かつたのであるが) 会に對しても、招いて下さつた幹事役に對しても、寔に相済まないと云う心苦しさを味つたのと、いつ話をする機会が来るか判らないので、いつ機会が來ても、朗らかに話せるだけの心の準備が必要なので、酒を飲んでも、飲み過ぎないように、絶えずセーヴしていたので遂には酒とタバコで口がにがくなり、夜遅く大阪へ歸つて解放された時にはグツタリと疲れてしまった。こんなことは私としても全くはじめての体験で、三時間立って続けに喋べられるよりも苦しかつたが、いゝ経験をしたと思つてゐる。しかし、この苦しさを幹事役が知つてくれていたことは後日その幹事役からあの時の慰勞にと云う訳で歌舞伎座へ招待された。私としては歌舞伎座へ招かれたことよりも、私をそうした苦しみを感じたのもらつたことの方がどなかつた。ほんどに涙ぐましくなるほどうれしかつたのである。それにしても良き幹事役たることも又難いかなであらうと思つた。

時は遷る

三十幾年ぶりに、別府の亀の井へ行つた。幾棟かの建物を抱擁した外廓は昔のままらしかつたが、旅館亀の井が株式會社亀の井ホテルと改称されていた。通されたのは本館の右側を少し這入つたところのNO・Iと云う木札の掛つた平家である。私が曾て十二日間滞在していたのも、このNO・Iであつたがその当時のNO・Iと、今のNO・Iとは位置こそ同じだが、小さく改造されてきた。昔のNO・Iは四方が植込みになつていて、他の建物から一切隔離され、一寸した妾宅と云う感じであつた。女中部屋や茶器の洗ひ場などもついていたが今のNO・Iは、標札をかけたら安サラリーマンの家と間違ひそうである。小さな前栽はついてゐるが、植込みがまばらなので、すぐ隣の平家が眼に迫る。なんとなく長屋住いと云う感じである。全体として小じんまりとした玄關と座敷と水洗便所と温泉とがあるのだ、アベツクで来た人たちにどつてはこれで充分かも知れない。隣りの家は見えてお互いに隔離されてゐることは今も昔も変りはないと云えば云えないこともないが、何んぞなく今の世のセチ辛さが亀の井の邸内にまで流れ込んでいるのを見逃がせなかつた。

こんなことは川柳でも云える。今の世の川柳にはゆつたりとした味や艶つぼさが不足してゐて、何んだかノドがサッとするような感じの句が多いようだ。これも時代かも知れない。



川柳と俳句の区別に 対する私見

—栗林農夫著「俳句と生活」を讀んで—

戸田古方

七 川柳と俳句のちがひ

すでに俳句史に見ましたように川柳と俳句は連歌俳諧の畑に芽ばえた兄弟であります。俳句の方は、連歌俳諧がそのうけついで伝統である人民文学をはなれ、中世以来の貴族趣味、風雅、幽玄へと妥協し勝ちで今日まで来しました。

川柳の方は大した発展もなく、人民というか町人のものとして停滞しながら明治時代に進みこゝに新らしく詩川柳となつたのであります。

川柳と俳句の区別のむづかしくなるのは現代になつてからでありまして、柳樽時代の川柳と芭蕉以後の俳句とは割合にはつきりしてあります。

最も簡単ないい方をしますと俳句は自然を写生したものでし、川柳は市井人のうたえるものでした。

折れたかと思へば起きる筏さし押へれば芒はなせばきりくす自然を詠んでも川柳は人間臭いの

です。

川柳の独壇場は人事です。

貰い乳にかわる碇の力過ぎ

松の内わが女房にちよつと惚れ

これらはみな古川柳から拾ひまし

たが現代句にもこれに類するもの

を見出すことが出来ます。自然を

呼んだ現代川柳に

海岸の松はにげ出す姿なり

しげる

もう帰れ帰れと花の寺は鳴り

青明

ほととぎす季節を逃げて来た男

満潮

又碇の句と松の内句の類句を俳

句に求めますと子規の句に

嫁入りて余所の姑ぞ打ちにくき

口紅や四十の顔も松の内

をならべて見るとやはり俳句より

軍配は川柳に上るようです。

これらの例句はいづれも路郎先

生の「新川柳講座」にあつたもの

ですが、新川柳講座の中には

「形式からいへば川柳も俳句も同

じく十七音字中心の短詩であり

ますが、用語が俳句の方が韻文

であり、川柳の方は主として平

言俗語であるために一読した時

に、形式まで違つていゝのでは

ないかと思はれる程違つた感じ

がいたします。たしかに袴と着

流し位な相違が感じられます。

その何れがいいとか悪いとかい

つていゝのではないのでありま

す。又云えもしないのでありま

す。たゞ一方には少しかた苦

しいところがあり、一方には極

くくだけたところがあります。

風にうけとれるのであります。

それは使用される文字や語調の

相違から、表現上異つた音律を

生じるからであります。

「それに俳句の方では切字とい

う約束があります。「や」「かな」

はいけないとか「や」「けり」

はいけないとか云つて表現上に

幾多の束縛があります。「春の

海」だとか「夏の月」だとかい

う季節をとり入れた季節とい

うものもありません。一人前の俳句

が作れるまでには、そうした一ト通りの約束をのみこまねばならないのであります。「川柳の方では切れ字がどうの、季感を入れねばいけないのというような約束は一切ないのであります。という訳ですから季を入れようと、俳句の季題と見るべき用語をそのままとり入れようと、一向差支ないのであります。しかし、それ等の用語を下手に使用すれば川柳とも俳句ともつかぬ鶴式な句が出来てかへりみられぬだけあります。つまり川柳では表現上かなりな自由さがあるのであります。しかしそれらもかなりであつて、無制限に自由である筈はないのであります。川柳には川柳としての約束があるが俳句のような切字や季節の束縛はもうけないといふのであります。こゝで一寸こゝとわつておかねばならぬのは一概に俳句といつても………定型律の俳句でなく自由律の俳句を作つてゐる人たちがあれば又無季の俳句を作つてゐる人たちもあるといふことであります。しかしそれ等の人たちの作品のよしあしは別として、教に於ては問題でないのどこに云ふ俳句とは特にことわらない限り定型派の句について述べていゝものと思つていたゞきたいのであります。川柳に於ても矢張

り定型派の川柳についてであることは云うまでもありません。」

路郎先生の言葉によつて定型の川柳と定型の俳句の区別はよくわかつたと思ひます。

右の文中袴と着流しとありましたが市井人のうたえる川柳はたしかに着流しの感じがあります。市井の熊公八公は袴がはけぬわけでもありませんがそんなきうくつなものには好みに合いません。作られる俳句だつたかもしれませんが作ろうとはしないのです。何とかいふ落語にも俳句の真似事をする長屋風景が出て来ますが、花鳥諷詠なんてわからねえやと川柳が生れて来てしまつたのかもしれない。疎開して日頃見かけない自然の風物の中に入つてくると季節が句の中に盛んに入つてくることは私も経験したことであります。

川柳の芸術としての伝統は喜怒哀楽の人事をうたう所にあり、も一ついへば人間の慾にからまる人間の弱点を縦横に題材とするところにあるようです。そこかで穿ちが生れ、批判が生れるのです。

八 現代川柳と現代俳句のちがひ

川柳の作句態度は實際に自由です。自由なだけ誤解されている点も少くありません。上品でないとか、詩性がないとか。

さきに川柳の段階について一言

しましたが、

男の子裸になるとつかまらず
武者ひとり叱られている土用干
泣く泣くもよい方をとるかたみ
わけ

女湯へ起きた起きたと抱いてく
る

道具方岩をちぎつて涕をかみ

これらの穿ちの句に対してはそ
うした非難もあるかもわかりませ
ん。しかし情味が段々加わつて来
て

寝ていても団扇のうごく親ご
ろ

よく寝れば寝るとて覗く枕蚊帳
さらに

貰ひ乳にかはる砧の力すぎ

から

南無女房乳をのませに化けてこ
い

までくれば上品、下品を通りこし
てジーンと目がしらの熱くなるも
のを感じずにいられません。真実
にふれるもの、作は古い江戸期
のものでも永遠に亡びない詩性が
じみ出しているのです。

明治以後の詩川柳もこうした所
に新しい感激を見出し再出発し
たのだと思われまます。

私は手近にある最も古川柳と新
川柳の対照をし易いものでこの話
をすゝめて行きたいと思ひます。

古川柳の詠史と私の作つた詠史を
みていただきます。

おつかさん又越すのかと孟子い
い (古)

百遷も孟子の母はいとはない (新)

有名な孟母の三遷ですが古川柳は
孟子を江戸ツ子のつねの言葉にし
て情景を出しております。私は百
遷といさゝかデイフォルムしたの
です。

十四本手を出し敷蚊追つている
竹林は今日も清談だけですみ (古)

二千九百九十九人は画家承知
練絹の嵩で美女にも段がつき (古)

さきの二句は竹林の七賢、あとの
二句は王昭君をよんだものです。
古川柳は所謂ソロバン川柳であり
まして七人の手だから十四本、漢
の後宮三千のうち只一人賄賂を画
家に贈らないで醜女にかゝれたの
が皮肉にも美女第一の王昭君、そ
のために匈奴の人身御供にやられ
てしまふ。ソロバン川柳はむしろ
狂句に近いあまりにも理智に走り
すぎたきらいはありますが面白い
ことは面白い、それにくらべて竹
林の方も王昭君の方も私のは堅す
ぎて味がありません。

日本史の方で
清盛の医者は裸で脈をとり
平服の近衛大将怪まれ (古)

風のある晩は三人抱き合ひ (新)

清盛が熱病で死んだことをよん
だ古川柳は有名です。そして「お
かしみ」もあります。重盛との
対面をよんだのと妓王妓女仏の三
人がいつしよに住んでいたあとの
句とはたしかにわれながら弱いと
思います。
佐野の馬戸塚の坂で二度ころび (古)

この勝負は何ともいえません。た
だ前書なしには私の句はわから
ず、はたしてあの鎌倉時代のはじ
めに天井があつたかどうか反省
さゝれて活字になつたことをはず
かしく思つています。

義貞の勢はあさりをふみつぶし (古)

田楽ときいて義貞下知をする (新)

これはあつさり古川柳へ軍配を上
げましよう。
昭和十五年、私が「川柳二千六
百年史」を出した時路郎先生は「
本書の詠史川柳は一読して従来の
それよりも遙に詩的情緒が横溢し
てあることに心づく……」と序に
かいて下さいました。詠史川柳
としての価値は「……その態度に
於きましては従来のものに比して
遙に真摯なものを見うけました
それを反対に詠史川柳としての興
趣を喚起する力は薄かつたよう
であります……」(川雑二六二號

川柳講座「詠史川柳について」
私はいずれのお言葉も有難くお
けしております。
つゞいて川雑二六〇號川柳講座
「川柳に読みこまれた俳句の季節」
を通して現代川柳と現代俳句へ話
を近づけて行きましよう。

元且だせめて眼鏡を拭きましよう
路郎 (古)

福寿草松にしたがひ候かしこ
り (古)

バスガールはみ出て春の風を切
り (古)

日の永き思へば古き掛時計
栄公 (古)

車窓暖かチルチルミチル顔並べ
形水 (古)

行水のそこを閉めてと女の子
石竹 (古)

尋ね人浴衣のまゝと書いてある
蚊帳の蚊も実は出口を探しする
聴松 (古)

結局は月など要らぬ飲仲間
多 (古)

落鮎はタマキ三浦と云う姿
八歩 (古)

十二月又前だれを踏んで立ち
かほる (古)

秋動き出すと大きな帯を締め
豆秋 (古)

金貸の殺されもせず十二月
満潮 (古)

の諸句が先ず上つておりますが
先生の説明にあります如く季節を

意識して作句してはおらないが、
季節にびつたりはまつているよう
に思われます。なかには川柳味の
薄くなつたものも見られます。
季節という俳句らしい道具をつ
かいましたも川柳人の句は俳人の
それとはちがいます。
しかし比較的川柳味の薄いと思
われる縁之助、栄公、形水氏らの
句を見ますと古川柳にはみられな
かつた詩といつか味がありません。
感じの句といつてはいるものであり
ますが感じの句といへば水谷鮎美
氏にはそらいつた佳句が少くない
様であります。
スタンドは寝て動いて生きて
いる
李花投影繡珍の靴に踏まれたり
これらはその鮎美氏に選句しても
らつた私の句ですが、こうい

アサヒビール
いつでも どこでも
三ツ矢サイダー



近作 柳樽

路郎選

しなだれて来たは踊りの券だつた 貝塚市
 イヤリング造花の枝にひつかゝり 同
 このパーも暇か女給が膝に来る 同
 ナンバーワン所詮は金でOKか 同
 女給うすく悪銭と知つていた 同
 火を煽ぐベレーおんなに養はれ 同
 酔つ拂い校歌の歌詞は確かなり 同
 教え兒を見つめて(六句)
 佛陀にも似たり笑顔で今日も有り 岡山県
 晴天の中にしよんぼり立つている 同
 黒板を第六感で読んで行き 同
 議論には負けても誠実さが光り 同
 交際は算数的には行きかねて 同
 視界みなカンパスに入れんとする子なり 同
 ロづけの後をどちらにも涙ぐみ 津山市
 そのかみの愛人が来て子をあやし クツシヨシヨシ 同
 持つてネクタイ派手になり 同
 からつばの頭に似合ふサングラス 同
 どちらかど云えば恐妻家にぞくし 同
 いつからか恋のコーチの方になり 同
 アベツクの旅日程がまたづれる 東京都
 女から財布の中を見透され 同
 ほつといておくれと女飲み続け 同
 夜行から夜行の旅も宮仕え 同
 梯子酒先づは芽出度く家に着き 同

病んだとて禁酒の氣等更になし 同
 肺切除を前にして
 遺言はないかと妻にからかはれ 貝塚市
 寝台車一票入れる人を乗せ 同
 憧れの祖國はチンジャラストリツブ 同
 礼云いに寄つて無心と間違われ 同
 遊園地流行歌手の来る人出 同
 六十でこんな悲しい恋を知り 岡山市
 内診に慾情するも春なれや 同
 旦那にねだつて金魚のお葬式 同
 明眸にしつと視られておじけづき 同
 子沢山齒ブラシの柄の色とりとく 同
 卒業して行く子達に贈る(五句)
 大工論誰にも負けず力説し 岡山県
 テレビ等夢見て配線図を睨み 同
 牛を追う綱にも父を偲びつゝ 同
 我を通す前に涙がこぼれ出し 同
 沈着な態度へ内氣さ偲ばせて 同
 十年振りにて退院す(三句)
 ふるさとに変わるものなし 奈良県
 胸廓は狭くも社会の風あたり 同
 十年の病履歴書刎返す 同
 何分咲きなど櫻よおかしかる 同
 我が駅は停らず都会を恋う日なり 同
 パンくゝの金の入齒が寒く射る 大阪市
 秘めごとをする年となり化粧する 同
 鉛筆の先から嘘がすべり出し 同
 制服を脱げばお酒も飲む女 同
 押賣に負けたる妻のそが好き 愛知県
 臥ていても印だけ捺せと持つて來る 同

句に眼を止める鮎美氏はその名の如く物を美化して見ていられるのであります。
 川維三〇五号円座句評の中で昨日も今日もとんぼは秋を流れてる
 という鮎美氏の句が取上げられています
 川柳らしさを知らすことが出来ましようか。」と尋ねたのに対してこの句のいのちは「昨日も今日も」にあるという意味のことを答えていたといふことがありました。
 君雲を話す心になり給へ
 科白にもなる美しき心の燈
 合掌の膝にも雲に似たるもの
 春雷の楳の花をゆるがせり
 われに強く焰のうまれくるいのち
 おそらく俳句を作る人、川柳の初心の人が見たら俳句だといつかもしれません、現に
 会者定離螢の光すまんとす
 という私の句を俳句だといつてきかなかつた人があるのです。
 咳をしても一人
 作業衣干せば風の中雑草花をつけ
 徹夜してきれいだなあと思たコスモス
 夜学生上君には戦斗帽よりないのか
 来て見せよ少年工となりし手を妻の断牛肉今日の食卓に



療養所子は饑でない話
 だんく〜と味付添の味になり
 聞かせたい客へ驚黙り込み和歌山県浅川 桑南
 倦怠期読書の趣味を取戻し
 養子ぼけなど云われる品が出来
 同 同
 未亡人会とは見えぬ賑かさ
 パトロール花見の喧嘩避けて行き 姫路市 難波 愁夢
 晝の風呂首だけ塗った女も出
 糸の切れどの妓も帯をさぐるなり
 同 同
 外套を脱げば細つそりしている娘
 困われて見れば女は淋しすぎ 岡山県 光好三四詩
 一号に座る積りの爛をつけ
 同 同
 舞鶴へ上陸迄の妻でした
 堂々ど二号も一票いれてくる
 同 同
 ビタミン飲んでますねんは太い足 具塚市 中辻 芳男
 延長戦となり冷しあめの賣れる
 同 同
 文無しと恋のないのが芝生に寝
 同 同
 新婚はお宮の松を見て帰り
 同 同
 政治家も香具師と並んで頭下げ 今治市 長野 文庫
 酒のんだ時に意見の一致を見
 同 同
 招かざる客へ漸く濃茶が出
 同 同
 誰にでも笑顔を見せて居る落目
 同 同
 弗に換算して月給の馬鹿らしさ 和歌山県秋月 宏方
 女給さんお乳がはつたとも云えず
 同 同
 政見は私腹の事にまで触れず
 同 同
 今月の赤字は知らずランドセル
 同 同
 春霞隣へ留守を頼んで出 岡山県 岡田 青果
 戦後派の証據あいの兒産みました
 同 同
 急坂になつてアベック引き返し
 同 同
 恐妻家靴の中まで調べられ
 同 同

マ、ゴトのこんな子供も恐妻家 大阪市 岩垣二点子
 亀が勝つた話その後もう聞かず
 同 同
 垂涎三尺と云う落しもの
 同 同
 キツスしてからは急轉直下なり
 同 同
 出戻の働く姿派手になり 岡山県 大塚美能留
 うぬばれて居たと氣付いた嫁後れ
 同 同
 妊娠し無事切り抜けた倦怠期
 同 同
 春霞貸切バスが又通り
 同 同
 來るところへ來ればT・B氣兼ねなく 三原市 山田 桂角
 坊や坊やこはT・B菌の部屋
 同 同
 女患室源氏の君を咎めまじ
 同 同
 火葬場まで等級がつきまとい
 同 同
 道義地に墜ちず駅長室に傘 神戸市 松尾 天信
 傘さしてまで行かすもパチンコに
 同 同
 おかずとつたら酒が又足らず
 同 同
 子供よけ〜日曜の長屋出る
 同 同
 清貧だなんてえらそうな顔でいる 大阪市 不二田二三夫
 ストリップパチンコ知らず生きている
 同 同
 体育祭では秀才だけが隅に居る
 同 同
 藥より神を信じる妻あわれ
 同 同
 不覚にも我が娘の恋へつんのめり 豊中市 加納山茶花
 妻に礼云う程かるき事ならず
 同 同
 臣茂から抜け切れぬ日本人
 同 同
 桑の実を又叱られる唇の色
 同 同
 さらばとて昔のように征く氣なし 大和 小川 学
 高田市
 結婚と別よと恋をまだする氣
 同 同
 災難に会つたように汚職の弁
 同 同
 立読みへ念押すように戸を入れる 岡山市 宗高ハツ茶
 同 同
 朋はれて金魚と住んで日の永さ
 同 同
 アベックへ聞かせる唄の保線工
 同 同

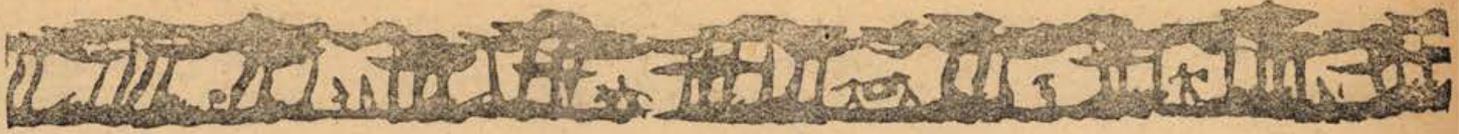
の各句はすでに俳句として紹介したのですが、俳句もこゝまで形がかわつてくると、そして鮎美氏の川柳と対比した時に柳俳無差別論も起したくなるのであります。

第一伝統即ち風雅幽玄へ迎合、妥協することからやつと抜け出て第二の伝統人民の俳句となつたと考えられるのが碧梧桐以来の現代俳句でありましょう。しかし私が度々「書き込み」として採録しましたようにこれらの俳句は何といつても川柳に近づこうと努力している。しかも川柳にもなり切つていない路郎先生の所謂鶴的存在のよりに思えてならないのです。さらりと俳句の名をすて、川柳へ帰投すべきでないかとさえ思えるのです。第二芸術といひ俳句解消ということもこうした鶴的存在にこそあてはまることではないかと思ひます。

もつと自由にふるまえる川柳に帰投して協力する意思があるならばもつと素直にのびやかに開拓出来るのではないでしようか。

こういへば俳人、ことに新らしい俳人は憤慨するか、川柳なんかと齒にもかけないかもしれません。百歩退つて少なくとも川柳の真面目な研究をすゝめたいと思ひます。

もつとも定型の古川柳と今日の現代川柳とを比べた時、無条件によくなつているとだけはいえない



葉卷投げ捨て、解散梟がつき 赤穂市 川西 去水
 官僚は役得花の旅巡り 同 同
 六法全書古くて争議負けを取り 同 同
 クイズ狂話するにもクイズ調 貝塚市 辻 圭 宏
 新婚は豆球さへも明る過ぎ 同 同
 顔の皺矢張り氣にオールドミス 同 同
 春來るカメラを下げて会社へ出 倉敷市 野田素身郎
 貸ボート元海軍の腕で漕ぎ 同 同
 残業すればしたで新婚ひやかされ 同 同
 日曜の妻には妻のプログラム 福岡県 岩田十三楼
 氏神の燈籠先祖は偉かつた 同 同
 学資みな反対して兄が出し 同 同
 ノツク聞き社長は伏せるボトトギス 大阪市 吾郷 玲人
 行き届く子供に明日が恐ろしい 同 同
 御指命の女給は世帯を持ちました 同 同
 紙芝居下駄片ちんの子もまじり 岡山県 岡野風の子
 金拾ふ夢でも見たいほどこがれ 同 同
 春風が誘ふか家出の娘がしきり 同 同
 小料理屋儲りそうな音刻み 出雲市 久家代仕男
 店位持たして欲しい口説きよう 同 同
 それ辻に続けと極右名乗り挙げ 同 同
 下積にされた恐りを酔が知る 大阪市 円波 太路
 ぎこちない守衛は元の少佐殿 同 同
 珍客とちくまの夜の蕎麦を喰ひ 同 同
 食べ物の事にもふれる婦朝談 米子市 小西 雄々
 物持ちがよいとライター出して 同 同
 靴下の穴に妻帯すすめられ 同 同
 出勤を送つて琴を弾くくらし 大和 戸田 悦子
 先客の土産のかさに出しそびれ 同 同
 新記録とはお見合の数でした 同 同

入学日妻に乳飲兒あてがわれ 大和 戸田 嘉一
 少人数へ義理が頼みに来る離房 高田市 同
 入墨があつてホールの支配人 同 同
 駄々押せばお医者も少し弱氣です 大和 岩垣日本村
 政治家を見る政治家にはなるな 高田市 同
 眞剣な奉仕へ人は嘘も言う 同 同
 子がなくて四十の妻の行儀よし 和歌山県 西 兎 山
 顔々々づらり並んで寄附募り 同 同
 苗木屋の嘘が三年後に判り 同 同
 病院の先輩に便所教へられ 貝塚市 高崎 雄声
 子はいらぬ俺に似た子になり 同 同
 大阪はごみ取る人も化粧をし 同 同
 商用の道で見て来た七分咲き 愛媛県 村上 旭童
 戸のすきにはさまつてたい、便り 同 同
 いつ休むのか老体でかせぐこと 同 同
 咳してゐるうちに螢の光すみ 広島市 米谷 巖
 クシヤクシヤの髪くしりの札で飲み 同 同
 いささかの自嘲をこめてマニキュア一 同 同
 飲けそうな顔やと無理に酌い 兵庫県 吉原 紅月
 決心を女の方にうながされ 同 同
 同じもの食べても妹だけが肥え 同 同
 自惚れの顔でフアッシュヨシヨシに 米子市 勝田 正郎
 コツプ酒どれも庶民の顔ばかり 同 同
 地声みな大きくなつた鋏を打つ 同 同
 ゆるんでた心を詫びて聖書繰る 和歌山県 美野百合子
 二言目に死ぬとおどされ敷か居 同 同
 看護婦に映画の批評聞かされる 米子市 大山 裾乃
 看護婦の癖をベツトでみなおぼへ 同 同
 診察が女医で下着が氣にかゝり 松江市 原 章 二
 恋人は来すストローが酒になり 同 同
 新緑の中の制服あたらしい 滋賀県 久保 和友

と想います。詠史川柳の引例に見
 ましたように、今まであまり入り
 こまなかつた詩性を取入れました
 ので調子が弱くなつてゐることも
 事実ですし、上品になつた部分だ
 け外人民的な第一伝統に屈したよ
 うにも思われましようが、それは
 それとしても、人民とよばれるも
 のが詩なんかのことに全く無関心
 な江戸の町人のレベルにいつまで
 もいないことも又考えられなけれ
 ばならないと思ひます。
 川柳が第二伝統しかも百年、二
 百年前のそれを姿がかわつて来て
 いますが、それこそ日本人民の
 進歩を示すものだと思へるのであ
 ります。
 鮎美氏の句を私どもは決して第
 一伝統への迎合だとも俳句の焼直
 しだとも考へません。
 氏は三十年以上もの永い間、川
 柳し川柳し川柳して来たのであり
 ます。鮎美氏の善心がすべてのも
 のを善意にそして美のふるいを通
 してみているうちに珠玉の様な諸
 句が生れたのであります。氏の観
 察と反省は全く川柳的に行われ経
 過して来ております。柳道三十年
 柳魂にきたえられ氏は川柳道を通
 つて高嶺の頂へ一歩一歩前進しつ
 つあります。
 さきに現代の新らしい俳句は解
 消するのあたり前だと申しまし
 たが、芭蕉にしても蕪村にしても
 子規にしても、又碧梧桐、井泉水



石鹼をシヤボンと言ふた祖母をもち 同 舞鶴へ上り支那語にさようなら 岡山県 繁松 玉露
 先着の男帳場へ使われる 同 会場の天井がふと氣にかゝり 大阪府 佐藤 房子
 豊作におしよせられた貨物駅 同 心斎橋義足へ軽い足乱れ 岡山県 松村 怠坊
 卒業が涙見せぬへ淋しがり 同 通勤の車内も春は女から 大阪府 森本黒天子
 老妻の乳の御用は孫のもの 同 宣傳とあれば野球もさす社長 京都市 高岡 薫
 パチンコの談義も女将聞かされる 同 舌打へハイ消ゴムと如才なし 岡山県 藤井 呆声
 ストリップまさか俵に逢わうとは 同 健闘を祈る候補がすれ違い 岡山県 國富 直人
 飲みに行くだけが櫻の見頃聞き 同 乳母車のぞけば黒い子が眠り 神戸市 岩田 一夜
 失業の煙草かせぎの子へすます 同 盲判一つで書類らしくなり 大阪市 神谷凡九郎
 姑と氣が合ひ夫もの足らず 同 僕だけが秘密守れば処女で嫁け 岡山県 長尾 越鳥
 汗流しボツ／＼やつて居ると言ふ 同 醉へば寝るくせ祭も半分済み 滋賀県 土守トン坊
 妻なればこそ酔体を抱き支へ 同 次男坊雄飛の天地見つからず 大阪市 中江破天荒
 元士官チャルメラを吹く世の移り 同 五人の子連れて来て買ふ避妊薬 高知市 岡本 元馬
 腕白に頼み仔猫を捨てにやり 同 念佛に祖母不機嫌をまぎらはず 岡山県 沖 一 糸
 落選の太い活字のあじきなき 同 はつきりとしじみ料理をされる音 下松市 徳光 秋人

フラダンス殿下ホノルル忘れ得ず 同 課長代理嘘言ふことも心得る 同 おでこだけ貴方に似たと皮肉られ 和歌山県 松元 三朗
 大地踏む夢ばかり見て二年病み 同 恋をしに短大へ行く娘を育て 岡山県 池田 古心
 遊ぶにはいゝ大学がさらに出来 同 母校から寄附のこししか言ふて来 大阪市 木口 賀峰
 スポンサーうちの放送だけは聞き 同 子の嘘は満足そうに聞いてやり 岡山県 小林 夢介
 仲人は満年令で話をし 同 追ひ越した車のパンクそれ見たか 愛媛県 鳥井 川鳥
 ノータイで大阪へ行く歳の勢 同 お献立読んで聞かして貰ふだけ 岐阜県 石神 古木
 この頃は白髪も抜いてくれぬなり 同 助役さん今日の人出のことにふれ 貝塚市 河揚 梵鐘
 稼げ／＼駅前バス折返し 同 税務署はペンの色まで不審がり 和歌山県 岸本 木魚
 取れぬ氣の電話ばり／＼やつちま 同 ブライドが傷つけられただけの恋 熊本市 高野 宵草
 酒飲もよ飲めば忘れる恋ならば 同 集金の声と知つてか返事なし 宮崎市 野口卯之助
 香水を匂はせ俵どこえ行く 同 轉ぶべき時が来てゐた中風なり 広島県 黒本 芳泉
 望郷の年年つのである 同 松屋町大風呂敷につきき当り 大和 高田市 横田 紅涙
 支配人の訛丸出し親しまれ 同 臨終のときのポーズを考える 貝塚市 上坂 朱人
 あゝあの娘あの娘が黒ン坊とゆく 同 先生のこの頃サラリーマンめいて 貝塚市 小島さぎす
 資本主義うれしやこゝた菓子喰え 同 春なれや撮つた写真は寝呆け顔 兵庫県 東 たけし

にしても、みな俳句の道を通つて
 頂をきわめようとしているのであ
 ります。私は俳句の立場をみとめ
 ないわけではありません。むしろ
 俳句の立場を考へるとき、最も先
 端を行くと考へている俳界の一群
 の人達が我々の作つた句を「こ
 れは俳句の真似をしている」とか
 「無季の俳句の下手なのだ」とい
 うような軽々しい態度はつゝしみ
 俳句道を来た人と、川柳道を通つ
 て来た人をもともに尊敬し合ふべき
 ではないでしょうか。

川柳には川柳の立場があり、俳
 句には俳句の立場があります。柳
 俳無差別には賛成しかねます。
 星夜の職がないと、がめられる
 層拾いにつと笑つて怪まれ
 (俳句)

非常に似ていますが、やはり川柳
 は川柳、俳句は俳句です。その各
 々は各々としての長短をもつてい
 ます。
 川柳の修行と俳句的修行という
 その過程は永遠にのこるものでし
 よう。しかしそれがわかればより
 高いものへ進むために手は握れる
 と思ひますし協力も出来ます。そ
 して日本民族の民族文学建立のた
 めに共に精進して行きたいと思ふ
 のです。

(未完)



飛・燕・往・來

福田山雨樓氏（横浜市）より

ぶきりように生れて天職授けられ 石川県 桑山 じよ
 退学にされて喧嘩が親しまれ 岡山県 中尾 貞教
 遠征は走る巨人にして帰し 岡山県 難波 陽炎
 六年間そりかえらせる票開き 岡山県 佐々部滿佐志
 嫁の荷が峠のもやに消えて行く 岡山県 安原 秀魁
 轉がればまこと長閑なピクニック 出雲市 日野加壽緒
 内申の順位を交へる鼻藥 岡山県 國正兼比羅
 女三人寄れば君の名で騒ぎ 和歌山県 谷口喜久治
 あの嫁のどこが悪いか飲み歩き 今治市 黒川 秀義
 銀幕を去つて幾年マダム老ひ 大阪市 笠井 勢波
 落魄に無口な友の眞実味 津山市 菱川 正美
 街角で手違ひ同志つきあたり 岡山県 池田 昌子
 輸送車の看護婦の尻見る若さ 貝塚市 竹内雨季舟
 手拍子で歌ふ花見に子も交り 山口市 田中 秋穂
 面目を保つた嘘を又重ね 奈良市 絹下 南天
 先妻に会へば口紅染めて居り 岡山県 横地ペン郎
 名弔詞こんどはお前も読んでやる 大阪府 関口 開山
 当選後も不宵の人であつて欲し 豊中市 森 彦 六
 花片を顔にかぶつて酔ひつづれ 大阪市 兒島與呂志
 母の愛しみく思ふ寮の窓 大和 高田市 中谷河太郎
 心得て居ります留守だと言ふのでしよう 鳥取市 泉 北 鳥

夫婦養子孫の世話までしてくれず 貝塚市 黒泉育久子
 ハットして声をのみこむ人違ひ 大阪市 清水 望峰
 アルバムの子に見せられぬこもあり 布施市 大西 天風
 行樂の春に過失死とは哀し 鶴田 乱舞
 花片が猪口へ来たこと嬉しがり 高知市 松下 蘇水
 パチンコの上質な課長親しまれ 倉敷市 赤木 正平
 浮氣した時の子もゐる子沢山 岡山県 岡本 薫翠
 基地の子のまご母をはつこさせ 貝塚市 芝原 洋史
 バラ／＼にした男も胸を病めるか 兵庫縣 原田つとむ

「交通四方山話」は誠に面白く
 拝見致しました。毎月かわつた
 御企画をお考えのことゝ存じま
 すが、一つ名句を拾う座談会を
 催され、各地区から予選された
 二十句を座談会で検討、五句位
 を推薦されては如何うでしよ
 う。古方・大八・塊人諸兄のも
 のもそれ／＼に面白く又興味深
 く拝見致しました。硬軟とど
 りにグアライエテイに富んだ編
 集と拝察致します。（中略）六月
 号への原稿を何とか書きたいも
 のと気分のよい日をねらつてい
 ましたが、伴が田舎から舞戻つ
 て来て心配をかけるので気分が
 落着かずとう／＼ペンをとれま
 せんでした。（二八・五・一）

★煙子省二氏（愛媛県）より
 社宛—
 祝憲法記念日
 貴五月号拜受低頭合掌御礼申上
 ます。巻頭言味説、私などもキ
 ビに附しその五十年連の古顔と
 なつていますが遂に病に負けて
 仕舞いました。二ヶ月前から悪
 かりしロイマチスが全身に殊
 に右手不自由左で支えて事を運
 んでいます。其の左が段々ハレ

てきました。病多忙。両手がき
 かなくなれば配給米が要りませ
 ん、断食ですね。友人から「俳句
 と生活」（新書）を恵まれ大体
 一度眼を通しました。貴誌上の
 と対読の楽しみを有す。知己友
 人のお世話様になる許り、すみ
 ません。乞食笑眉主今夏を越す
 は難きが如し。
 底意鬱悶思いのロイマチス
 床辺ツ、ジ満開、鞍馬さんか
 ら「平忠盛」は骨が折れたと申
 し来りし、松山から納豆を取り
 ませたまました。伊予製をたべ
 るのは初めてです。（五月三日）

★櫻川不水氏より
 一 路郎 慶乃宛—
 永らく御無沙汰していま
 すが、其の後御変りありま
 せんか、昨年十一月十五日
 九州八幡出港以来五ヶ月振り
 今朝神戸へ入港致しました。今
 船内はゴツタ返し混雑を呈し
 ています。ホノル、経由メキシ
 コ、ペルー、チリと南米地方
 を転々として来ました。南米は
 氣候もよし実にいゝ所です。帰
 途ホノル、に寄り二時間陸上陸
 しました。（日本酒手配の為）
 その節偶然にも 魔花麗さんと
 電話で初対面しました。五日位
 の碇泊ですから早速帰宅しま
 す。親子五名全員相寄り相談し
 ますが、先生にもお会い致し度
 ですが、一刻千金の数日ですか
 ら六ヶ敷いでしょう。ではお元
 氣にて（四月十四日於神戸）

麻生路郎著 水武書房版

川柳を研究したい人々に好適の書

好評噴々

本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新
 指導書として唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」
 から説き起して収むるところ三十七講、平明で、親切で初心
 者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得する
 ことが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書
 である。敢えて一説を薦む。

B 六版 (二二二頁) 改正定価一三〇円 送費 十六円

取次御注文は 大阪市住吉區内方代四丁二五
 川柳雜誌社 振替口座大阪七五〇五〇



雑筆 春秋

「選」に当つて

永田六龍子

て居た。

川柳の「選」に当つては敢て川柳のみに止まらず如何なる作品の「選」に当つても決して私を差しさむ可きでないと言ふ事は先賢諸氏が強調される迄もなく百も承知の事である。が遺憾ながら凡人の悲しさと云うか、修養の不足と云うか、やゝもすれば「私」がはつきり「選」に現われて居るのをしばしば見受ける事があり、誠に残念至極である。

句会に於て選者が

「私の好きな句を頂きました」

と云うのは余りにも、はつきり私が現われて居り、懐ひ可き言葉ながら、事実は全くその通り、私の好きな句のみが入選し発表される訳である。

話は一寸横道に入るが私の忘児が存命中短歌に精進して居た。九州で短歌専門誌を発行したのは私の亡兄が嚆矢であつたと聞いて居る。その亡兄が、後進を、戒しめる為、或は与太話的によく云う

「懸賞短歌に入選するのは実に簡単だ、その方法は先ず第一に選者をよく見極め、次にその選者

はどんなものを好むか、此の二つをはつきり心して応募するならば入賞、就中、三彩に入賞する事は九九%確実だ」と云つて居た事は今も私ははつきり記憶して居る。

之は「当て込み」と称し如何なる場合も絶対に排撃す可き事であり、吾々柳人の敵として懐しまねばならぬ処である。而し此れを川柳に就て見るならば、例えば酒の好きな選者に若し酒の百害を列べた句を出そうものなら、或は秀句であるにしても未発表の「没」の部に入り、椿の好きな選者に椿の礼讃した句を出そうものなら、仮令愚句であるにせよ秀句と迄は行かずとも先ず入選が確実である。

斯く論じて来るならば駄句は没秀句は発表される事は当然である。然し私の聞きたいのは、その秀句、駄句は如何なる根拠によつて決定する可きかである。例えば或一定の規格があり、その規格に

合わないものは皆不合格、不良品であり、規格に合つたもののみが合格品であり、採用品と云ふ訳になる。然し吾が川柳にはその「規格」なるものがない敢て云うならば「五七五」の規格が存在するのみであらう。その五七五も近時、金科玉条ではなく十七字以上もあれば、又不足したものもある。所謂破調の句である。処が、此の規格に合わない、実は不良品、不採用品の中に秀句が見受けられるのは如何した事か。

茲に於て選には「はつきり」私が出ていと思われるのである。

句碑について

安川久留美

「生きているうちに銅像建て、置き」この銅像も戦争のおかげで撤されたのが多い。然し歌碑や句碑は石材だからこの心配はない。もしあるとすれば大きな地震に倒れる位のものであらう。

近頃川柳人にも生きているうちの「句碑」があちこち建つようになつた。結構なことである。出来るならホルルにも路郎さん辺り

選者の「私の好きな句を頂戴しました」が額面通り受取られる事になる。Aの選者に依つて不良品、不合格品となつたものならば、BのCの選者も俱に又没にす可きで

ありながらDFの選者になると或はそれが秀句として扱われ、或は三彩に入らぬと保証出来難い事である。

茲迄詮じ詰めると「私の好きな句を頂きました」が本当であり当然であるかの様に思ふのである。或は云う。それは「選者の客観、主観の見方の相違だ」と私は客観主観の見方の云々を云うのではなく不良を論ずるのである。秀句は如何なる場合も秀句であり、愚句は何処迄行つても、誰が見ても愚句であらねばならぬと固く信ずるのである。

の句碑が建つたら？一層川柳界の為に喜ばしい、だが然し句碑は人間よりも句が主であるから、作品中の自薦に佳句をかいで欲しいと思ふ。一夜作りのものでは後世の川柳人をあやまらしめる。今迄に沢山出来た句碑のうちでは亡き劍花坊氏が鎌倉建長寺に残した「咳一つきこえぬ中を天皇旗」の句がいつち永遠にのこる作としてよいやうだ。

くれぐれも将来の句碑に斯うした日本的なものを選ぶ必要があるやう。

何と云う柳誌だつたか今記憶にないが、課題吟の選者の言葉に自信ある句を投ぜられ不幸没になつた人は更めて雑吟に提出される様切望する。

とあつた。誠に好感の持てる三文である。此の選者も或は「私」を意識されているかの様に見受けられるのである。

以上「選」に対する私の一つの感じを率直に申述べたに過ぎないが、私と思ひを一つにする柳人も決して尠くないと思ふ。先賢諸氏の腹藏なき御批判を得れば望外の幸甚だと思ふ。(盲言多謝)

社の黒板

★編輯強化のため不朽洞会員中から左の二氏を

編輯部に推薦(五月)

真鍋一瓢氏

八木摩天郎氏

川雑編輯局

瓶の銀山

大阪市長瀬大市
西通一丁目四四

株式会社 硝子銀山

電話 四七四七番



人間横丁

東野大八

(II)

伴陸と弘禪

衆院選の当落がきまつた翌日、大野伴陸氏が得意満面語つたことは、当選の喜びではなくて東京三区でタヌキを見事蹴落した話だつた。タヌキとはいわずと知れた川弘禪和尚のことだ。



大野伴陸 快がるほど

「奴さんの對抗馬に当てたこちら候補は、なんといつたつてまだコドモ、そこで吉田総理はじめわれ／＼が、徹底的かつ集中的に援護爆撃に出た。わしは三度も出かけていつたが、そのたびにいつたことは、タヌキは人間じゃねえということだつた。こいつは効いたね、グーとね、グーといつたよ。あの薄汚ねえ小狸がね。ワッハハハ。」

と大した御機嫌である。何がこんなに満悦なのか、きかされていゝる側ではかえつて妙に白けちまうという工合だつた。

吉田対鳩山、鳩山対大野、大野対吉田・吉田対広川、広川対鳩山こう並べただけであとは結構。知る人ぞ知るあやとり式これが、バカヤロー解散直後の政界天気図だつたのである。従つて狸に直撃弾を浴びせた伴陸センセイの快哉ぶり、これは相手が相手だけに判らぬ事もない。だがご当人の彼が痛

たのである。従つて狸に直撃弾を浴びせた伴陸センセイの快哉ぶり、これは相手が相手だけに判らぬ事もない。だがご当人の彼が痛

という段になると、おのずと話は別である。彼伴陸をかく有頂天たらしめた、政治の何か、その「何か」からわれわれはつねにはるかなる埒外にいるということだ。

もう五、六年も前のことになるが、広川和尚が選挙の応援に四国へやつて来たとき、インタヴューをしたことがある。ニュースカーの上で約十分ぐらいの時間だつたが、時に彼、今をときめく自由党幹事長だつた。話の末に

「ナニ大臣？ウフ……そんなものやるほどまだおりや落ちぶればせんよ、大臣なんてありや君、隠居仕事でね、わつちや厭だね、そんなことデマだよ、ウフ……。」



広川弘禪 ぼくと

「先だつての選挙では、わしの競争相手のAに君たちは票を入れたじゃないか、そんな話はAに持つていくのが筋道というもんだ、わしはしらんよ。」

した底知れない人間的魅力がそこにあつた。よし底には何が無くとも、これだけの人間の貌が絶えず用意されているというところは、こいつは立派に一人前である。もちろんこんなインタヴューのあと、四

合長にでもなり下りそうな裏行きとは、これもつれない人間世界の現実だろ。

一方伴陸、こちら側になると話もふんだんだが、端的に彼の面目を語るに充分な一例がある。彼の選挙区のある郡の町村長会が、衆議院議員の橋渡しをもちこんだ。すつた岡村派は牧野にはかなわぬまでもせめて一泡……というつもりだつた。そこで岡村派必死の追撃

とそつぽをむいた。その一言があつた。今度の選挙ではその郡から、予想外に彼の票が伸びた。最高点当選への効果、まさにこの逆手一本にもあずかつて大いに力ありというわけだ。

とにたく弘禪、伴陸（のお二方とは限らないが……）あたりのアクの強い政治家のやることは一事が万事、世の人間の常識の基本的なものからかけ離れていることは確だ。この離れ方を解釈すると、人情の機微を彼等は至極技術的にコナして、二二んが四を、二二んが百と出すところにその本領があるようだ。

大物と小物

大物の落選候補として全国的な話題に上つた牧野良三氏についてこの一言の底に私は氏の敗因があつたと思つてゐる。

解除となつて牧野氏が出馬して岡村某が遺囑、そのつぎには岡村が出たが、その公認出馬について牧野氏が許さない、かくて感情的に両者対立してこんどの選挙となつたという次第。意地になつた岡村派は牧野にはかなわぬまでもせめて一泡……というつもりだつた。そこで岡村派必死の追撃

一路集

ピクニック

武部若菜選

遠縁を訪うてみる氣のピクニック 芳泉
 ピクニックだけ二人は押しだまり 梵鐘
 療養の身のピクニック聞き流し さぎす
 弁当がらよき詰めたピクニック 茶々
 ピクニック曲つた辻へ又戻り 太路
 ピクニック荷物を持たされて無口 彦六
 裏道へアベック消えるピクニック 島浦
 ピクニックバムの留守番氣に懸り 勢波
 ピクニック用心棒にさそわれる 満佐志
 ピクニック牝牛に話しかけて行き 寛峯
 ピクニック二人丈とは母知らず 文笑
 ピクニック駅で見かけた組も居り 木魚
 ピクニック兼ねて療養所を見舞い 甲馬
 楽しみは弁当にありピクニック 秋穂
 マムとこのように並べたピクニック 茶々
 スコップの汗に氣を置くピクニック 光郎
 口笛の伴奏で行くピクニック 悦子
 ピクニック明日の暮しは明日のこと 水堂
 ピクニック幼稚園までバスが来る 波天荒
 ピクニック社長が奢るから飲む氣 九晃
 折詰の殻を乱したピクニック 摩天郎
 ピクニック好いた同志は遅れ勝ち 良坊
 垂直に雲雀が鳴くもピクニック 不二

幼稚園お供の多いピクニック 風の子
 ピクニック蜂にさゝれて帰つて来 紅月
 ピクニック帰りは重いポータブル 不二
 ピクニックバスの中まで飲んで居り 一平
 ピクニックしても淋しさつき纏い 夜潮
 サンドイツチれんじの匂う手でつまみ 水客
 子を探し廻つただけのピクニック 夢介
 ピクニック今日充ち足りた顔ばかり 桂月
 ピクニック云い度い事のある二人 七面山
 落日に追われて戻るピクニック 鉄児
 父さんの瓶が立たない花庭 芽花
 ピクニック彼女の足に合わずなり 春菓
 佳・ピクニック坐れは触れる肘もなく 芽花
 佳・ピクニック線路歩いたのも楽し 春菓
 佳・思出の場所へ来て見るピクニック 芳泉
 佳・ピクニックこゝろは米がいくらす 甲馬
 佳・ピクニック買出しをした村が見え 谷水
 佳・ピクニックコースへ逆に鮎が跳ね 一瓢
 佳・ピクニックこゝろで家がほしくなり 葉光
 入・ピクニック水車の梅へ廻り道 鮎美
 地・ピクニックこゝろでもマムは忙しい 惠二朗
 天・ピクニック汚れた肺を意識する 芳仙
 軸・いぢらしい家計を見せてピクニック 若菜

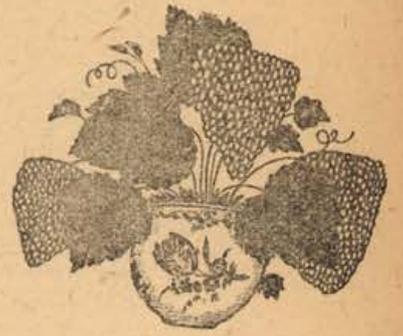
乳母車

麻生梨里選

乳母車とめて化粧の順序見る 大然
 乳母車底が抜けそな子に育ち 惠二朗
 乳母車置場に困る二階借り 圭安
 泣き出してから乳母車トイもき 一善
 乳母車電車ごつこにひいてゆき 同
 乳母車定紋入を売つて越し 勢波
 旧友と会い乳母車はつとかれ 悦子
 小児科を叩き起した乳母車 摩天郎
 二太郎を乗せて楽しい乳母車 千容
 乳母車孫の指図のまゝ押され 青果
 乳母車もまつさら春の水溜り 水客
 乳母車乗れぬ不平の子をつれて 鉄児
 先生の和服が似合ふ乳母車 三林坊
 御近所が専ら使ふ乳母車 凡九郎
 蘭米のルート知つた乳母車 若菜
 お人形もせて出て行く乳母車 さぎす
 簡うすべを知つた野良の乳母車 呑水
 乳母車児と童謡の歌で到き 代仕男
 玄関の乳母車にも見栄があり 百合子
 チンドンヤの後追ふこゝろ乳母車 太路
 乳母車遂にマイクに捉えられ 甲馬
 乳母車予算に入れて家の幸 高志
 乳母車買へば子守が急にふへ 雨季舟
 泣かすだけ泣かして睦の乳母車 光郎
 乳母車踏切へ来て万歳し 呆声
 乳母車押して母だと間違はれ 破天荒
 乳母車乗せた頃には夢もあり 雅業太
 乳母車お宮の鳩が待つて居り 房子
 学校の美談となつた乳母車 同
 子の愛は家に過ぎたる乳母車 喜久堂
 乳母車混血児かとふりかへり 登志晴

アベックへもう振り向かず乳母車 桂角
 乳母車犬ちよろ／＼とつて来る 潮花
 乳母車泣かしたまま品を選び 意坊
 乳母車どうせ失業している身 谷水
 乳母車押すのがつまり恐妻家 雄々
 街録を遠くで聞いている乳母車 同
 乳母車姉ちゃんらしく押しだまり 真砂
 乳母車蒲団の下から財布出し 天信
 乳母車市場へ通ふだけに買ひ 喜久治
 繩飛びの端をしばつた乳母車 香平
 佳・乳母車買つて女は家を空け 九晃
 佳・上の子が貸してやらない乳母車 茶々
 佳・乳母車の方へ目をやる長話 夢介
 佳・踏切りを最後に渡る乳母車 房子
 佳・乳母車の中でもけんかする年子 木人
 人・乳母車お馬お馬が言へるなり 日本村
 地・乳母車実母の愛をまだ知らず 鮎美
 天・乳母車とめて父ちゃんマツチすり 横寿喜

品質優良
先カワペン
TACHIKAWA PEN
大阪市東区豊後町四八
立川商事株式会社
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画



旅 雜 音

麻 生 路 郎

ので、出立の前夜にチブスの予防注射が発熱して夢うつつの状態になり、トラシクへ入れるものの指令が出来ない。家族がい加減に、詰めて込んで呉れたので寝衣一つ持たずに出かけたこ

ともあつた。それでも一向不自由を感じない私である。

旅へ出ると、いろんな雑用がなくなるので、ヤレ〜と云う気持ちになる。スガ〜しい気持ちになる。汽車を降りると「お疲れでしたでしょう」とねぎらつて貰うが、コチラはちつともお疲れではない。

疲れているとすれば、それは汽車の疲れではなくて、旅に出るための準備の疲れだと云えよう。準備と云つても身の廻りの準備ではない。仕事のやりくりである。家を出るギリ〜になつてもまだ、中腰になつて原稿を書いていて書き終らぬうちからコレは五種の書留連達だよとアレコレと用を云いつけねばならぬからである。北支蘆盤の旅へ出る時など僅かの日数しかないのに、ムリに大学へ頼んで、コレやチブスの予防注射を短時日にやつてもらい、その証明書をもらつたのはいいが、注射をする日数の間隔にムリがあつた

家庭では、何かが記録されていゝる紙ぎれ一つ捨てない性格が旅へ出るとガラリと変わる。なるべく持ち物はすくない方法をとる。よくよくの場合でない限り土産物すら提げて行かない。だからどんな長旅にしても洋傘一つ持つて行かない。ところが天佑と云うのか私は旅先で雨になやまされたことはない。では雨は降らないのかと云うと決してそうではない。雨は降るが、私が外路へ出る時には必ずカ

ラリと齎れているのである。公会堂のようなところで、二時間講演を頼まれる。その二時間の間降りつつけていても、演壇を下りて戸外へ出ると不思議と雨は止んでいゝ。それから温泉へつく。又降り出す。一ト晩中降る。「明日は雨かなア」と皆が心配そうな顔をす

岡山縣赤坂町にて



(左) 氏介大田政 と (右) 幹主郎路

柳 界 展 望

▲本社五月旬会は二日の午後六時から下寺町二丁目の新緑したたるばかりの光明寺で開催され盛會だつた。当夜の不朽洞賞カツプ受賞は真鍋一瓢氏▲大阪通信病院川柳奈良吟行は五月廿四日午前十時に上六小劇場前に集合、奈良市の春日寮で開催▲毎日新聞社主催のレクリエーション・ポート(関西汽船こがね丸)の別府行が五月四日午後一時三十分大阪出港、その夜高松港を出てから船中で川柳に關する講演があつた(講師は本社主幹麻生路郎)▲南区医師会文化部杏林川柳会は五月十九日午後七時から迷路居で開催された▲大阪府立堺労働セツツルメントが文化教室を開設した(川柳教室の講師・麻生路郎)その第一回の開講並びに旬會が五月十四日午後六時から堺市宿院の労働會館で開催された▲大阪市警視庁警察部警察学校文化講座(川柳講師・麻生路郎)は五月廿二日午後一時二時四十五分まで▲南海電鉄川柳旬會は五

月廿五日午後六時から粉浜の南海親和寮で開催された、以上何れも麻生路郎本社主幹が出席指導▲川柳支部旬會は五月廿三日午後六時から摩太郎居で開催▲川柳阿倍野支部旬會(大阪市)は五月十六日午後六時からアベノ橋地下近畿直營食堂で開催▲川柳弓削支部旬會岡山県は五月九日に開催▲川柳布哇支部ワイロー社五月旬會は十一日に小田沙兆居で開催された▲堺市宿院お旅所に市が設置した集會所竣工記念川柳旬會が五月五日午後六時から堺川柳人グループ主催堺観光協会の協賛の下に開かれ盛會だつた▲国鉄クラブ文芸部春季川柳大会(岡山市)が五月十七日十三時から岡山市中筋松竹座裏の山陽旅館で開催なお本會は川柳岡山支部五月旬會と共催して行われるので知事盃が呈賞される▲福島県郡山市の川柳會館発表式の模様が四月廿七日NHKの録音ニエリスでその一編が放送された▲川柳維大聖寺支部(石川県)五月旬會は十四日福田卓風居に於て開催▲玉野市春の文化祭川柳大会が五月十日、和田支所楼上で開催され盛

會だつたと▲田中辰二氏句碑建設記念川柳大会(八代市)が四月五日に同市の商工会館で開催された、なお同大会にさきだつて午前十時から八代城北の丸址、松井神社境内で熊本大学教授田中辰二氏の句碑「移り香にひかれ今宵の影をふむ」の除幕式が盛大に行われた(写真参照)▲川柳きやりの六月旬會は一日午後六時から東京都千代田区神田須田町柳森神社で開催される▲広島川柳會第一例會は五月十五日午後六時から広島貿易會館で開催▲川柳桜島支部五月旬會(大阪市)は七日に日立造船所に於て開催▲山沢英雄氏校訂の「諷風柳多留」(三)が三月廿五日に東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三株式會社岩波書店から刊行された。校訂者の獻身的努力、出版者の多大な犠牲に對し敬意を表すると共に、柳人諸氏が挙つて本書を購求し味讀されんことをおすゝめする。臨時定価八拾円▲阪下也奈貴氏(東京都)は四月に東京浴場組合の理事長に當選された▲野中稔一氏は千石荘で十年の長きにわたつて闘病生活をつづけていられたが去る四月に退院され目下は郷里の奈良県磯城郡初瀬町九九二で静養されている。今後の御自愛を切にお祈りする▲川上三太郎氏(東京都)は五月二日NBCから川柳選評の放送をされた▲津田千舟氏(貝塚市)は五月中旬に肺葉切除の手術をうけられるとのことだが、結果の良好をひたすらお祈りしている▲水野水茶花氏(豊中市)は水茶と改号▲黒本芳泉氏(広島県)は福岡葉留路氏が広島市に去られたあとの川柳竹原支部にあつて作句精進を續けていられる▲浜

るが私は平気で「朝起きたらカカリと霽れてるよ」と予言者のようなことを云う。この予言は全く百発百中である。こんな調子で私は決して雨に会わないので洋傘一つ持たずに旅をつづけて来たのであるが、人生の旅はそうは行かない。九人の子どもを四人まで喪つてゐる。女中難時代に、四女が生まれ、母体が気づかわれる状態にあつたので里子にやつたことさえある。「天井の低くさも知らず子は生まれ」と云う句が出来たのもその頃である。多くの家族を抱えて、失業したこともあつたが、失業ぐらゐにはヘコ垂れなかつた。しかし相當に悪戦苦闘の人生の旅路であつたには違いない。浪のまに／＼漂う生活をつづけさえすれば、そんなにも、悪戦苦闘をしなくても済んだのであろうが、常に正論を持ち真ツ正直に人生行路を乗り切らうとしたために、逆浪へ自ら飛び込んだきらいがないでもない。今にしてそう思うが、私の性格が、安易な道を選らぼうとしなかつたのである。どちらがよいかは、棺を蓋うて判ることである。まア私としては何処までもマ、イ、ゴーイング、ウェーで行くより仕方ないだろう。

私が旅へ出るのは大自然に触れることの欣びよりも親しい人たちに会えるよろこびが大きいからである。幾度出かけても、その附近の景色に接したことはないところが幾らもある。私にとつては景色そのものより、むしろその地方の風俗人情に興味を持つ、従つて汽車の中でも決して退屈をしない。旅へ出て一番困るのは御馳走攻めである。私は酒を少しのむだけで料理はあまり喰べない。喰べないと料理が不味いから喰べないのだと曲解されはしないかと気がつこう。酒は飲むが献酬はしない。コレも曲解され易い。御馳走に対しては前もつて一応はことわつておくが、それ以上は云わないことにしている。と云う訳は、御馳走は私へだけのものではなくて出席者全員の御馳走なのであるから、私が喰べないからと云つて、しなくてもいいとかしないで呉れとか云うべきものではないと思ふからである。だからその人たちが召し上るのは自由であるが、私が喰べなくても、自由にさせて欲しいだけである。尤もどんな御馳走に對しても私は心から感謝してゐるのである。私の前に沢山な御馳走がならんでも殆んど喰べない時もあるが、そんな時にはエチケツトでないような気がしていけない。その点、すき焼などだと、ユテラが喰べなくても、そちらで喰べてくれるので大いに助かる。

野奇童氏(岡山県)は弓削小学校に勤務されているが、三月末の卒業生に對し記念品として、卒業生の性格を詠んだ短冊を贈つたところ学童からも父兄からも大変よろこばれたそうである。この事は一昨年、教頭の石田麦秋氏と田淵土器氏によつてははじめられたので卒業生の担任教師としての氏は昨年と本年の二回目だそうだが本年は同僚の禿山氏と共に贈られたそうだ▲清水羅洲氏は一昨年頃に千石荘を退院され目下は郷里の富山市民病院に入院、川柳會を作つて作句に精進されている▲前田義風氏(石川県)は氏の川柳生活三十余年の作品を目下整理中のおたよりに接したい、句集の出る日を期待する▲故上田芝有氏(大阪市)の百ヶ日法要が令息上田文彦氏によつて五月十七日午前十一時から南区西高津中寺町の蓮成寺で修営された▲丹波太路氏の糟糠の妻登代子さんが四月廿六日午前八時半に心臓弁膜症のため大阪市東住吉区田辺東ノ町五丁目一八の自宅で急逝された。行年五十八歳謹んで悼む。

▲下掲の写真説明は前列向つて左から宮本千代咲・佐野ト占・松岡柳猫・北川一進・黒田緑・高野宵草・九十九文子・浅香須惠子・第二列向つて左から永松道雄・満田魚屋・田中辰二・同令息・池田青山・瀬口安彦・小出帯刀・服部高夜・第三列向つて左から鹿本実信・檜垣晚泉・伊集院平野一字九・谷川丸石・山田信雄第四列向つて左から淵川秀敏・河本球水・春田節夫・谷口道興(敬称略)

▲各地で開催される大会等の日時場所其他に就てお知らせ下さい。▲柳書の刊行柳誌の創刊をされた場合は一報されたい▲個人(生・死・転居・改号其他)も出来るだけ詳細にお知らせ下さい。但し取捨並に削除は編集部に任すること



八代城北の丸址松井神社境内に建設された中辰二氏の句碑

★BK川柳の會

課題 「浴衣」

麻生路郎選

締切 五月三十一日限

用紙 ハガキ一枚三句

宛名 大阪市東局区内大阪中央放送局BK川柳の會係

発表 三月号で既報した発表日を左の通り変更六月八日(月)朝七時半より第二放送で放送

正課
▲前号廿八頁下段、阪田商会(広告)の住所芝田村は芝田町の誤り
▲前号廿一頁二段十三行目水菜女は水菜女と訂正▲二月号二三頁上段四一行目の作者夢生は雄声の誤りにつき訂正する。

各地の句會・柳誌の創刊・柳書の刊行・個人消息其他

各地で開催される大会等の日時場所其他に就てお知らせ下さい。▲柳書の刊行柳誌の創刊をされた場合は一報されたい▲個人(生・死・転居・改号其他)も出来るだけ詳細にお知らせ下さい。但し取捨並に削除は編集部に任すること

いきひとりの美顔水
緑谷照天堂



いのちある句を創れ

投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社五月句會 (大阪市)

二日午後六時

於 光明寺

新緑の庭は美しかった。前回に比して更に出席率がよくうれし集りだつた。路郎師の柳話川柳人は社会をもつと深く観察し、研究しなければならぬ事に就いて述べられ、実例をあげて世相の面白さを説かれたので作句研究以外にも大いに得るところがあつた。鮎美・古方両氏の対談句評は満年・麦太郎・幽王の三氏の句を掲示して短評を加え、最後に「川雑」五月号川柳塔へ発表の鮎美氏の句を古方氏が、古方氏の句を鮎美氏が互に句になるまでの動機を詰問され、続いて其心境を披露された。席題兼題の披露後不朽洞賞優勝カップは真鍋一瓢氏の手に落ちた。閉会九時。(幹事)

出席者 路郎・少将・一点子・正司・風車・勢波・正斗・雄声・朴堂・学・嘉一悦子・麻曲美・塗杖・水客・杜的・玲人賀峰・迪夫・香林・六竜子・梅志・ひろし・番茶・三司・丸九郎・正則・淡舟・没食子・文蝶・一十・ゆずる・しげお・紫香・雅集・白鳳・静馬・摩天郎・水茶山茶花・義英・生々庵・小松園・水堂・省三・博也・白柳子・古方・秋窓・のぶとし・豆秋・天貧・春巢・沐天・勝巳・花村・恒明・貴山・夢裡・一瓢・鮎美・葉・好四郎・へとち・梨里・霞乃

兼題 「男の子」

麻生路郎選

また金魚殺してしもた男の子 しげお
男の子ばかりで母の苦が絶えず 水堂
子沢山頼る男の子は弱し 白柳子
漬物の石一つにも男の子 嘉一
泣きもつて又わるさする男の子 花村
男の子ばかりなので畳なで 秋窓
恐しさマツチする趣味男の子 貴山
ママの手を振り切つて行く男の子 玲人
男の子来てひな壇がゆれてゐる 塗杖
道間へば蛙下げる男の子 紫香
夫より一人息子を大事がり 省三
男の子今日も垣根の上に居り 正斗
又しても土にすわつた男の子 白柳子
ても意気地ない共学の男の子 一十
男の子隣の鯉を見上げてた 凡九郎
男の子まりつきになつて独りぼち 秋窓
血を流つて育てた息子赤になり 省三
男の子の中に僕と云ふ娘もまじり へとち
泣き顔はかくし男の子で戻り 一瓢
もう母を女と見てる男の子 路郎
月給は半端それでも男の子 路郎

兼題 「身勝手」

西尾葉選

身勝手な尻でぐい／＼席をとり 塗杖
恐妻の名へ身勝手も認められ 番茶
身勝手な先き立つ不孝が笑はれる 生々庵
身勝手から家の猫にも嫌はれた 秋窓
入院をして身勝手な腰が折れ 香林
身勝手な姑今日は寺参り しげお
身勝手は承知甘えるだけ甘え 博也
身勝手をいふ客店の良いお客 静馬
御破算にする気身勝手はかり言ひ 花村
身勝手なことを頼杖考える 春巢
党利党略とに居るかとも云わず 香林

兼題 「中毒」

清水白柳子選

身勝手が審判所まで来てしまひ 嘉一
身勝手な母に退ひたい子の悲願 勢波
身勝手を笑つてすまじ新世帯 義英
身勝手な女に花見を誘はれる 杜的
身勝手な話と思ふ靴の紐 水客
身勝手が段々目立つ倦意期 水堂
身勝手なもうべんちら言ふて来ず 恒明
身勝手な寄附信心を説いて去に 学
身勝手な去就へ墓穴掘つて居り 十四郎
身勝手と身勝手同志笑ひ合ひ 山茶花
身勝手な解釈弁護士だつた 日本村
身勝手な夫を泣きに姉が来る 正司
身勝手を問ひ詰められて果報 博也
身勝手な同権論で落ちてゆき 生々庵
身勝手と知りつゝする神仏 天貧
身勝手な奴やとどきま、者が云ひ 葉

兼題 「中毒」

清水白柳子選

パトロールカー中毒患者乗せてこび 白鳳
中毒のことからPTAがもめ 香林
中毒へ出前の皿がまだ残り しげお
先生の膳だけ中毒でない不思議 一点子
赤ん坊だけが中毒除外され 塗杖
集団中毒僕は留守居役だつた 凡九郎
あたりまつさかいと弁当きまらぬ 古方
アベツクで行つたのがばれる食あたり 小松園
値切り到したさばで結局中毒し 花村
風の月ボン中毒の隙が空虚 正司
隣人を意識のそとにボンを打ち 天貧
臨終の首へあわてたボンの空 正則
ボン中の母は神様にもすがり 春巢
中毒の記事とりに来る山の宿 文蝶
日の丸弁当に中毒なかりけり 貴山
中毒で宿に寝て いる京の春 正司
サバ酢にあたり桜の下で寝る 豆秋

席題 「暴君」

須崎豆秋選

中毒の箱から海鼠すべり落ち 梅志
汽車賃を払らうて中毒して帰り 紫香
どら息子だけが中毒のがれたり ゆずる
喰ひ意地の方が中毒して居らず 紫香
口止めのおごりて中毒つたも云へや 水客
中毒のまきそへとなり猫は死に 恒明
金貯めた中毒らしい癌を病み 生々庵
お互いに中毒ですアと酌まはし 葉
中毒で死なしてからの好き嫌い 麻由美
中毒もせず拾い屋の生きつづけ ゆずる
油さすやうにお酒の要る軀 一点子
アル中に良妻だけが残つてる 風車
友達が死んでもチリのうまさかな 香林
中毒の心当りはげかしとき 一点子
旅馴れぬ一人中毒して残り 水客
酒仙とも言はれれれれれ 葉
思ひ当る節毒消しを飲みに起き 番茶
中毒を母の予感に助けられ 悦子

席題 「暴君」

須崎豆秋選

暴君は音のしそうなものを投げ 白柳子
暴君もパチンコ玉はまゝならず 秋窓
暴君が寝ついた襖そつと閉め 番茶
暴君のように振舞つてゐて寂し 一点子
泣かされた暴君なれど恋しくて 一十
親に似た子の暴君を叱られず 天貧
てきばきとして暴君のたのもしく 一十
暴君をたしなめてゐる四畳半 玲人
暴君の頭たゝかず孫が出来 山茶花
暴君の坊やに祖父の目が笑ひ 勝巳
暴君の子に暴君が生れて来 梅志
ネクタイをしたまゝ暴君寝てしまひ 紫香
暴君の案外外はお人好し 雅巢

暴君は坊やなのよと嬉しそら 正司
 暴君としての父しか覚えてず 水客
 暴君のひとりになれば淋しがり 恒明
 暴君もよし俺には一人の伴なり 六童子
 暴君の或る日は聖書なども読み 春葉
 暴君が二号にやさしい人であり 賀峰
 暴君を寝かせ茶漬の音となり 紫香
 タイラント酔ひがさめれば無口なり 小松園
 手内職して暴君に育て上げ 小松園
 暴君へ風呂の熱さも気に入らず しげお
 妻の死に暴君馬鹿々々々泣き ゆずる
 暴君へ猫もなるべく近寄らず 豆秋

席題 「自炊」 北川春葉選

朝飯へ自炊はいつも磯自慢 秋窓
 パチンコで自炊雑話とつてくる しげお
 こげ癖がついて自炊の味気なく 秋窓
 日曜日自炊天ぷら揚げている しげお
 ねぎ一つ自炊当番へ千円札 貴山
 婚約が出来た自炊の春の歌 少将
 女子大出の女房があつて今日自炊 小松園
 日曜の自炊を友も食べて去に 紫香
 もたいなやごもく捨場へは自炊 貴山
 自炊して母へ知らせる貯金高 玲人
 自炊の子訪へば味飯炊いてある 勢波
 替りはんご自炊気まな娘に育ち 水客
 自炊する気楽さ三日分もたき 天貧
 ライターでつけて自炊が茶をわかし しげお
 故郷からの母へ自炊の腕をみせ 正司
 空罐は妻帰る迄積んで置く 番茶
 焦げたのを隣りが知らして居る自炊 一瓢
 家庭持つ日が迫つてる自炊なり 一十
 自炊ですのて綺麗な風弁当 古方

恐妻は留守の自炊が美味すぎる 少将
 自炊また楽し若さが歌になり 一点子
 フンダンにマッチ使うて自炊する 春葉

席題 「横丁」 土井文蝶選

横丁へ曲れと匂いふんとくる 貴山
 奢る気の友に横丁廻らされ 悦子
 横丁のマダムに派手なうわさあり 三司
 横丁を出てからはでな酔ばらい 花村
 横丁で待てば胡散な眼で見られ 朴堂
 横丁は塀に鳥居が書いてあり 一十
 バトロール横丁へ来た人だから 十四郎
 横丁のかすとのにほいよんさる 賀峰
 横丁へ顔をきかせたコップ酒 凡九郎
 横丁へニユースマイルが帰つて来 しげお
 横丁に住み電蓄を噂され 少将
 横丁の宵を素顔で来た流し 朴堂
 御利益のある横丁の石畳 古方
 横丁へ曲つて祝儀袋開け 雅葉
 横丁を一廻りして来た噂 一点子
 横丁の天使に宵の燈がからむ 風車
 口笛で横丁ぬけるいニユース 杜的
 横丁へ二人気になる曲りよう 少将
 横丁ではめをはずしている課長 朴堂
 横丁のガラスにうつる髪をなで 学
 横丁の方が詳しい主任が居 しげお
 横丁は今日もおしめの竿を出し 少将
 横丁を這入つて豆腐よくさばけ 水堂
 横丁へ今日も来てゐる自家用車 省三
 横丁から下手な都々逸きかされる ひろし
 横丁を徐行して来た霊柩車 同
 横丁は横丁らしい密附の額 水堂
 給料の遅配横丁の灯が淋し 天貧

うまいとこある横丁へ誘われる 博也
 横丁へ曲れば腕がもつれ合ひ 嘉一
 横丁は花見の機嫌もち込まれ 水客
 横丁を曲れば月もついて来る 杜的

川梅田支部句会 (大阪市)

三月二十五日 於 阪神ビル

水谷鮎美報

海岸の虹へ無情のドラが鳴り 帆加夫
 虹消えて故郷に遠き旅役者 三司
 通り雨ビルにかゝつた虹の橋 一夜
 一と駅をあかず眺めた窓の虹 夢生
 頓狂な子供の声に虹を知り 雨水
 コップ酒のれんを出ればビルへ虹 鮎美

川淀川支部句会 (大阪市)

四月二日 武部香林報

ストツプのきかぬ情熱持ちあぐり 都詩子
 ストツプをしてさ知らぬ陳情書 若菜
 めとる日も花の手入れを怠らず 凡太郎
 青春の花を買うても冷やかされ 若菜
 春は花からと造花の下で飲み 香林
 花便りせわしい人の気も知らず 天貧
 花に行く人と別れて安定所 花村
 テレビジョン俺には高嶺の花であり 六童子
 理想もうテレビの置場所考える 凡太郎
 テレビジョン金持ちの張る見栄にまれ 天貧
 出不精の母へテレビがまだ買はず 香林

川備前支部句会 (岡山県)

三月二十一日 於 浜田久米雄居

浜田久米雄報

失敗は苦勞が足らぬ事にされ 柳風子
 へそくりへちよつとそるはん持つて見る 柳穂

売上げへ一算入れてうまいお茶 柳穂
 午後五時が近くそろはんだ合ひ 東岸子
 そろばんで喰ふ指五本とも動き 櫻句楽
 ふらい豆にもお土産とかいてあり 正州
 デパートで国の土産を見てかへり 運平
 末ッ子にみんなの土籠渡しとき 久米雄
 母さんへあまえて見せる婿の前 櫻句楽

川岡山支部句会 (岡山県)

四月十二日 於 赤坂中学校

大森風来子報

製材所こゝから山の町となる 弓削平
 これがその赤坂町とバスに揺れ 玉泉
 驚も鳴きモーターも唸る町 荅石
 町制の祝賀菜種の花盛り 花村
 村が町になろうと俺は百姓さ 花村
 この辺にビルも建ちそう干田橋 路郎
 決心がつかない内に酒が済み 一雨
 決心はお風呂の中でして上り 婦美枝
 決心のつかないまゝで逢いつて 宇柳
 養子もう帰る決心風呂焚かず 石童
 子に未練あつて戻つたようい 十坊
 結婚のうわさだけではあきらめず 真

小兒科
 内科
 性病科

安岡醫院

安岡三四郎

道頓堀・日本橋南詰
 東へ半丁浜側
 電話南⑤三二四六

未練ある方が子供を取るといい 藤波
 後添の心に未練が消えてゆき 芳流
 合併へ未練がましいこといわず 飄野
 再婚と聞いて未練の血がたぎり 娘句楽
 本当の痛さを顔でまづこらえ 美能留
 病人の顔を往診先づ覗き 三林坊
 実権を素顔の妻が握つてい 敬貢
 子の顔の汚れをふいて母楽し 平太郎
 カンバスは意中の人の顔になり 大介
 先輩の悩んだ椅子で又悩み 一山
 トラツクが嫁の荷を積む春霞 笑陽
 トラツクに可愛くゆれるマスコット 素人
 ストップのピラヘトラツク一寸止め 惠美子
 葬式の列ヘトラツク徐行する 高良
 トラツクが郷土の山を持って去に 春仙
 嫁の荷を積んでハンドル酒気を帯び 晴の介
 トラツクに積むと嫁の荷淋しすぎ 風来子
 差押に來たトラツクに子がたかり 双葉
 逢引の場所に先手の客があり 茂平
 初めての逢引すぐに見つけられ 水吞
 逢曳が温泉マークを別に出る 十九平
 逢曳に行く娘が母に見送られ 青果
 誕生日忘れた年を子が祝い 柳水
 祝宴がたけなワエブロン引つはられ 三四詩
 二日酔する程飲んだ祝酒 格一
 祝日が日曜に來て雨が降り 素蜂
 給料日までお祝いが待たされる 美婦適

川 弓削支部句会 (岡山県)

四月十七日 於 金光教会所 丸山弓削平報

釣銭は男気下女に呉れてやり 白頭
 釣銭の要らぬ正札つけて置き 鉄兒

妹が好きで姉にも優しくし 牛歩
 妹は美人で姉を老けさせる 麗甫
 立てられた帯見ぬ振りして帰る 風樹
 金魚鉢割れて帯の柄をにらみ 柳童
 ネオンの灯見えて夜道を急ぐ足 笑泉
 声一杯下手な話を聞く夜道 水甫
 残業の夜道弁当箱が鳴り 鉄兒
 アベックに夜道は楽しいものゝ内 七面山
 面白い男盃よく廻り 不老
 面白い奴ぢや社長のお気に入り 一貫

川 下關支部句会 (下関市)

四月十二日 於 慈光寺 石川侃流洞報

一合を慎んで飲むほとけの日 蘇堂
 仏院今迷ひの俺を責る様 租影
 桜のよい寺へ遍路の廻り道 藤市
 愛弟子であつて手加減せぬ教 柳娃
 虫切りの艾へ母の心遣り 藤市
 改札の列の遅さへ延び上り 蘇人
 停止線鎖りだけ犬のびてゐる 九呂平
 飄単の艶へ隠居の話し好き 蘇人
 松葉杖艶のあるのを淋しめり 粗影
 長火鉢別れ話に艶をふく かうた
 子のない夫婦へ茶器の艶ぶきん 柳慶
 商標を真似てさもし利を稼ぎ 藤市
 通じたかどうか手真似は笑つて 米三

川 日立櫻島支部句会 (大阪府)

四月二日 於 日立造船所 真鍋一飄報

逢曳きを隣の恋に見つけられ 天風
 逢曳きは熱の上つた方が待ち 正照

逢曳きをうすく母に感ずかれ 巨船
 混線のまゝ逢曳の電話切れ 一球
 逢曳へ湯島の梅がかはるなり 潮花
 縁に來た猫にふかれて犬は逃げ 潮雀
 縁側へ注進めいた客が来る 有泉
 庭の木を賞めに縁まで通される 龜洋
 縁側へ半病の母出る日和 牧湖
 縁側へ廻り保険屋まだねばり 一飄
 コーヒーとケーキが恋のわなになり 幸子
 恋ひろて帰つた夜のハーモニカ 美津女
 落ちてゐる花さえ恋の歌になり 万亀子
 言ひ訳のたゞぬ恋さえ捨てかねて 花美
 胸じつとおさえて恋の鼓動聞く 花子
 四十の恋は帰さぬ顔になり 千代美
 制服に恋ありクリムつけはじめ ひさみ
 思ひ出は祖国はなれた子へつぎ 秋花
 入学へ親の苦勞を子は知らず 牧湖
 入学へ嬉しく背負ふランドセル 望峰
 入学へPTAの派手な柄 清潮
 入学へ母が恋しい手をひかれ 定美

川 京都支部句会 (京都市)

四月十六日 於 仲源寺 村松夢裡報

終発を待つ一と群のにぎやかさ 誠史
 一と群の鳥がみんな阿呆と鳴く 紫郎
 くだぶれて來て一と群をり過し 迷々
 啞の子のみぢめ綺麗に生れつき ひさ子
 独身のみぢめさシキッにあるよこれ 芳郎
 又記事になる竹藪のカルモチン いくを
 松葉杖情にすがる花の下 久子
 金をかぞへる心みぢめになつて 豊次
 定期券みじめな男とも思ふ あきら
 落選を慰め合つて夫妻寝る 紅寿

版写騰田阪
 二五町田芝区北市阪大
 会商田阪 株式会社
 番一九九五島福話電
 番四一三六五

川 大聖寺支部句会 (石川県)

四月九日 於 那谷光郎居 野村味平報

手土産の芋国の土付けたまゝとよ 上
 上げ底を知らぬ土産を提げて行き 味平
 丹前の柄を知つてる土産店 日人
 來客へ土産をねだる子を叱り 譽木
 お土産を開けば子供輪に坐り 桃園
 土産にはちよつと足りぬ鮎を釣る 味平
 見学の旅に土産を買ひ廻る 和子
 玩具箱姉の大事も紛れ込み 光郎
 箱書があつて雑市値がはずみ 酔羊

みじめさを耐へて義理を立てて 晏子
 惨めさを見せまいとする意地に泣き 夢裡
 惨めさを売りものにして酒氣に慣れ 迷々
 抜け道は心得てゐる元税吏 折草
 抜け道は竹の子の皮踏んでゆく 豊次
 抜け道の危い井戸を母案じ みてい
 ぬけ道をく行く山の僧 蘇海
 妻の声子の声丘の草薫る 晴芽
 もう夏の薫り胡瓜が店に出る 晏子
 樟腦の薫お節句の薫 鳥雀

川 堺支部句会 (堺市)

三月二十四日 於 八木摩太郎居 八木摩太郎報

恥かいたことには触れぬ婦朝談 豆 秋
表紙絵は買ふておくれといふ姿 貴 山
カパーする表紙見てくれ見えてくれな 凡九郎
失言を笑つて済ます吐が出来 雄 声
失言を水に流して貰う酒 豆 秋
幼稚園弁当だけは持つてゆき 竹 声
幼稚園生みたての虹シャボン玉 湧 泉
幼稚園これから狭き門で有り 英 二
病上り新芽の庭へ手を引かれ 淡 舟
新芽出て生きる喜びふと感じ 竹 声
病棟の窓の新芽に励まされ 香 林
待ち呆け柳の新芽むしつてた 葉 光
隣の子に又芍薬の芽をふまれ 伯 洲
病床に幾度び新芽見ることぞ 摩 天 郎
発禁書表紙包んだまゝで貸し た かし
官庁の書類表紙のまゝ売られ 摩 天 郎
恋敵家付と云ふ強味もち た かし
恋敵同志で同じ趣味を持ち 羅 生
あれきりで田舎を捨てた恋敵 摩 天 郎
恋敵三日と待たず衣裳替へ 三 平
ライバルへおのが弱気をはがかり 淡 舟
失言を意地からんで来る男 し げ お
失言をはつと気付いた女客 た かし

川 貴生川支部句会 (滋賀県)

三月十四日 於 夢生居 黄瀬美秋報

看護婦が母に見えたり姉に見え 春 水
看護婦も和服にかえて花をいけ 屯 斎
看護婦の愛情試歩の落葉ふむ 斗 志
看護婦の顔が重なる手術室 美 秋

川 浜寺病院支部句会 (大阪府)

贈所新三報

看護婦のカン恐ろしく、木人
出張の夫待つ間を里帰り 敏 子
まだ嫁かぬ友うちらむ里帰り 紅 月
はねつるべそれも懐し里帰り 夢 生
母さんにきく事がある里帰り 春 葉
若夫婦けんかの果の里帰り 一 彦
へそくりを母にも分ける里帰り 凡 骨
金持ちになつた夢捨て切れず 迷 草

南区 杏林川柳会 (大阪市)

三月十七日 於 珊枝郎居 南捨舟報

中立の中に左と右が出来 某 女
犬も喰はず子等も中立守つて 珊 枝 郎
この場合中立として稼ぐ肚 捨 舟
中立は思慮の深げな顔ばかり 比 呂 史

南海電鉄川柳会 (大阪市)

友淵貴山報

中立と云う事にして弓をひき 生々庵
翌朝は中立線が乱れてる 彈 正
女児四才既に鏡に写すしな 迷 路
絞められはせぬかきつらみを見 太 希 志
鏡台へ吸ひつくように紅をさし 瑞 川
梯子酒逃げそこなつて夜を明し 兔 庵
夜明けまで飲んで廻れる若きなり 一 哲
常連の梯子も来る午前二時 捨 舟
梯子酒元のところへ舞ひ戻り 生々庵
梯子酒其の名は御前様となり 烏 耕
梯子酒次は俺がと先に立ち 比 呂 史
死ぬるまで母が苦にした梯子酒 珊 枝 郎
何軒目ですかとマダム慣れたもの 同
いつまじはくし、の札で梯子酒 生々庵

みをつくし川柳会 (大阪市)

四月十二日 於 天王寺中学校 戸田古方報

離縁状別れを飾る貯金帳 光 二
貯金帳四拾五入での利子がつき のほろ
玩具箱へ貯金函が混ちつてた 凡九郎

川 柳友の会 (大阪市)

三月二十八日 於 帝国化工大阪工場 佐野牛歩報

貯金して末をたのしむ独り者 せつ子
つもり貯金とおに忘れてる様 古 方
大あくびして結核菌を吸いこんだ 正 斗
あくびなど気にもとめずに話下手 圭 水
猫のあくび顔の影をうごかせる 古 方

淡海莊川柳会 (淡路)

三月二十八日 原田つとむ報

逢曳きを女の方からリードされ 香 雄 留
逢曳きの場所だけ言わす電話きり た ん じ ち
逢ひに行く背中へ土産ねだられる つとむ
剃刀の痛さも愛嬌の娘床 淡 水
陳腐なる言葉も生きたランデブー たけし

東京そばと

灘一とすじ

大 萬

梅里の店

★大万川柳(第廿八回)を募る
兼題「雨変り」路郎先生選
締切・六月十五日(初版五旬以内)
発表・六月廿一日(店内に掲示)
御投稿は大万宛・どなたでも



編輯局にて

★隅から隅まで読める雑誌にした
いと云うのが、本誌の念願であ
るその意味で読者からのいろ／＼
な御注文もお聞きしたいと思う。

★本誌の記事の多くが他の雑誌の
追隨をゆるさぬ社会性を持つてい
ると云うので大変面白がられてい
ることは本誌の苦心が買つていた
だけた訳で編輯部の大きなよろこ
びとするところである。★本号の
座談会は不朽洞会員で犬や猫の飼
主に集つていただき、川柳を通し
て犬や猫の話をしてもらつた。集
つていただいた会員以外にも、犬
や猫を飼つていて随分面白い話題
をもつていられる方もいるだろう
とは思われたが、その方の調査を

不朽洞

会から

▲中島生々庵
博士(大阪市)
は五月三日母
堂一周忌法要
のため夫人令息等同伴で京都の本
願寺へ参拝、夕べから三休橋の中
島小児科医院で法要を了された。
▲本田恵二朗氏(岡山県)は四月
十二日の赤坂町誕生祝賀川柳大会

やつているひまがなかつた。しか
し筆記が充分にとれぬほど熱をあ
げて喋つてもらつた。犬の飼主
の大鶴喜由氏はわざ／＼京都から
やつて来ると云う熱心さだつた。

★東野大八氏は政治性と社会性を
ミックスした「人間横丁」の続稿
に、マイ、ゴイングウエーと云
う執筆ぶりである。★安川久留美
氏も久留美氏らしいものをちよッ
びり雑筆春秋欄の随筆記事もスベ
ースの関係で、載せ切れなかつ

た。★本誌は名篇名作であれば、
大家新進の区別なくどなたの原稿
でも掲載するので、ドシ／＼寄稿
されたい。尤も取捨は編輯部に一
任されたい。★そろ／＼暑くなる
ので、例によつて柳人交歓の暑中
広告を募ることにした。ホントに
暑くてやりきれなくならぬと広告
を出す気にはならぬかも知れぬが
ホントに暑くなつた頃では間に合
わぬのでよろしくお願いする。
(路)

からの帰途岡山市の山陽旅館での
岡山支部路郎師歓迎宴に出席後、
下津井へ行かれ十六日大原町へ帰
宅された▲富士野鞍馬氏(東京都)
は指が痛んで執筆を休んでいられ
るとのこと一日も早く治癒される
ようお祈りする。▲西いわを氏は
社用で浜松市弁天島へおもむかれ
五月一日は浜松名物凧揚げを見物

されて帰阪される由六畳位は並の
大きさとのこと。▲大西迷窓氏(香
川県)は五月十日母の日に長男を
儲けられた母子共にお元氣とのこ
とお喜び申上げる。▲水谷竹莊氏
(大阪市)は夫人同伴で九州の旅に
出られ五月十一日福岡市博多玄海
荘から通信を寄せられた。佐世保、
長崎、鹿児島、別府を廻遊十八日
頃帰阪すると。▲路郎先生は五月
十日南区医師会のリクリエーショ
ンに招かれ中島生々庵夫妻等と共
に淡輪、友ヶ島、加太、和歌浦、
海南市の温山荘等を廻遊された。

▲前田伍健氏(松山市)は五月十
六、十七日に市が催す松山築城三
百五十年祭に、松山八百八狸の関
係から狸行列をやつてもらいたい
と市から頼まれ、アツと云わ
せる珍案を企画中だと。▲延永忠
美氏(岡山市)は五月十日は玉野
市の句席へ出席されること。
▲水谷鮎美氏は四月廿八日社の会
合で琵琶湖畔の湖南荘に一泊され
た。なお一月廿七日深夜に盗難に
あつた三十六品の内十一品が戻つ
たとのこと。▲浜畑胡蝶氏は大正
区鶴町四丁目一九九に転居。▲上
田春柳氏の嚴父喜代松氏が四月廿
四日に大阪市西成区西萩町五の自
宅で永眠された。行年六五歳、謹ん
で悼む告別式は廿五日午後三時か
ら四時まで自宅で執行、不朽洞会
から路郎、豆秋、恒明、梅里、貴

山、梅志、愛論の諸氏が焼香した
▲姪子省二氏(愛媛県)は白内障
による視力減退を憂慮されている
快癒を祈る。▲佐野ト占氏(八
代市)は田中辰二氏句碑建設の世
話役として活躍されていたが観光
シーズンに入つたので最近は大忙
であるとのこと。▲大森風来子
(岡山市)は岡山大学附属看護学
校の修学旅行を引率して大阪、京
都、熱海、鎌倉、江の島、東京、
日光の旅をされ、四月二十一日夜
江の島旅館から「江の島の夜景も

柳人交歓暑中廣告を募る

是非一口は!!

川柳雑誌社

★一口金百円。
幾口でも申込み
れたい一口分の
原稿は住所と姓
と雅号程度。
活字指定はおま
かせ乞ふ一口
分は五分の一段
組三行。
★原稿締切は六月
末日限
★広告料は前金の
こと切手代用可

りれし平和塔」の句信を寄せら
れた▲藤本満年氏(東京都)は多
忙な中から、夫妻で雑詠や題詠を
競作していられるとのこと、四月

廿二日には大森風来子の来訪をう
け歓談された由。▲山田季贊氏(香
川島県)は四月廿九日から五月二
日まで滋賀県へ帰郷された。▲福
田安夢氏(大阪市)はひまわり社
の回覧雑誌部の業績が大いに上つ
たので更に新刊雑誌配達予約部を
増設、老舗の権利を買収して一大
飛躍を期せられている。西成住吉
区方面の柳人は挙つて申込まれた
い(西成局区内北吉田町二〇)

▲大西野介氏(大阪市)は二回目
の手術後の経過もよく五月十日に
退院され目下自宅で静養されてい
るが、一日も早く健康をとり戻し
氏独特の健康に接したいものでは
ある。▲阪田良坊博士(下関市)が
所用のため哲子夫人同伴で上洛の
途次、四月廿五日夜八時大阪駅で
路郎師と三分間の停車時間を利用
してホームで歓談されたと俺には
三分間でも会いたいと云う愛人が
あるんだよと路郎先生すこぶる御
満悦である。▲牟田一哲博士(大
阪市)は四月廿五日期学会で西下
の途次下関駅のホームで阪田良坊
博士と初対面の歓談を交わされた
由。▲政田大介氏(岡山県)は五
月七日アサヒビル会社の招待で
吹田工場見学、八日朝、大方の松
江梅里氏訪問、路郎師とは行違つ
て会えずに帰岡された。▲四月の
常任理事会で路郎師から左記二氏
を地域的關係から新に理事に推薦
されたので合議決定した。
藤本満年氏(東京都)
川村好郎氏(堺市)

川柳不朽洞會

指 導 麻 生 路 郎
 贊 助 池 沢 樂 居
 長 谷 川 一 徹
 長 野 晴 浜
 藤 村 守 作
 中 田 明 雄
 白 川 吉 吉
 中 村 祐 吉
 高 安 六 郎
 藤 村 雅 光
 田 中 辰 光
 岩 崎 愛 二
 洞 友 二
 鳥 山 一 步
 沖 野 岩 三 郎
 龜 井 晨 修
 田 村 孝 之 介
 山 本 雨 迷
 安 川 久 留 美
 山 路 閑 古
 前 田 伍 健
 柴 谷 宰 二 郎
 蛭 子 省 二 郎
 麻 生 葭 乃 二
 橋 本 緣 雨 鈍
 高 本 亞 純
 沢 田 四 郎 作
 東 野 大 八
 不 朽 洞 會 員
 一 特 別 會 員
 中 島 生 々 庵
 奥 村 丹 路
 戶 倉 普 天
 上 田 翠 光
 木 村 孤 浪
 戸 田 古 方
 水 谷 鮎 美
 西 尾 葉 子
 市 場 没 食 子
 一 特 別 會 員
 福 田 山 雨 樓
 寺 井 銳 々
 前 山 北 海
 古 川 麗 花 麗
 内 藤 草 一 郎
 三 輪 晚 翠
 村 松 夢 裡
 大 坂 形 水 裡
 藤 岡 至 芸 瑠
 井 上 湧 三
 北 林 松 代 三
 宮 田 不 二 風
 西 垣 錦 風
 川 村 好 郎
 築 山 快 夢 起
 永 田 里 十 九
 高 田 抱 逸
 小 田 沙 兆
 市 岡 曉 舟
 三 鴨 美 笑
 林 益 施 風
 白 砂 施 風
 一 正 會 員
 吉 田 水 車
 大 西 入 步
 須 崎 豆 秋
 石 曾 根 民 郎
 正 本 水 客
 黒 川 紫 香
 丸 尾 潮 花
 北 川 春 巢
 石 井 白 面 人
 布 崎 方 正 川
 尾 崎 不 水 龜 山
 桜 田 久 米 雄
 浜 田 申 仙
 好 崎 小 松 園
 菊 沢 燈 竿
 逸 見 白 柳 子
 清 水 九 坂
 鈴 木 一 笑
 英 川 恒 明
 小 川 玲 之 介
 浪 永 雅 美
 德 部 香 林
 武 部 雅 美
 大 森 風 来 子
 岡 島 嶺 泉
 木 下 幽 王
 福 田 安 夢
 中 島 鉄 洲
 新 川 博 也
 丸 山 弓 削
 直 原 七 面 山
 黒 田 笑 泉
 上 野 粗 影
 狩 野 正 司
 石 岡 正 村
 西 村 花 村
 河 代 日 村
 家 沢 芳 尋
 黄 瀬 美 花
 藤 本 如 川
 西 口 滿 秋
 姫 田 夕 鐘
 福 島 鉄 兒
 黒 田 久 米 女
 藤 本 茶 々
 塩 浜 一 路
 谷 内 一 草
 福 本 扇 骨
 布 村 南 子
 榎 南 夏 六
 田 中 遊 星
 西 山 い わ を
 杉 山 一 貫
 家 本 富 至
 横 部 牛 歩
 服 部 九 平
 大 森 娛 句 楽
 長 谷 川 三 司
 荒 木 哲 水
 山 中 志 乃 布
 桑 原 養 痴 園
 成 瀬 月 仙
 若 林 草 右
 足 立 春 雄
 有 働 芳 仙
 大 西 迷 窓
 延 永 忠 美
 地 俱 山 風 樓
 浜 畑 胡 蝶
 阿 形 一 杉
 坂 田 良 坊
 石 川 侃 流 洞
 大 森 苑 女
 安 岡 珊 枝 郎
 長 谷 川 迷 路
 南 谷 拾 舟
 黒 木 弾 正
 牟 田 一 哲
 河 村 瑞 川
 木 村 無 名 林
 田 中 烏 耕
 藤 原 虚 鳥 水
 益 永 貞 女
 大 倉 四 案
 山 田 季 贊
 山 田 鳥 荘
 水 本 無 尽
 水 田 千 石
 中 村 た だ み
 山 本 喜 久 堂
 東 喜 久 堂
 鈴 木 天 貧
 木 村 千 容
 田 垣 方 大
 那 谷 光 郎
 野 村 味 平
 木 村 水 堂
 勝 所 新 三
 花 岡 英 子
 八 木 摩 天 郎
 福 田 丁 路
 水 谷 告 天 子
 佐 々 木 告 天 子
 楳 原 一 善
 田 村 藤 波
 峯 尾 魚 々
 岡 田 夜 潮
 中 谷 仙 坊
 坂 井 三 葉
 政 田 大 介
 中 山 中 納 言
 白 井 三 林 坊
 安 倍 寛 子
 青 柳 扇 子 仙
 岡 村 牛 耕
 稲 葉 鳩 花
 下 山 清 潮
 本 田 惠 二
 真 鍋 一 朗
 飛 芸 春 風
 松 川 杜 的
 馬 場 夢 生
 永 田 六 竜 子
 村 上 ゆ づ る
 森 本 法 泉 子
 井 野 格 一
 白 井 吞 風
 日 置 文 笑
 中 島 兎 庵
 佐 野 牛 歩
 丸 山 三 平
 尾 野 お さ む
 白 山 紫 郎
 飯 島 二 桂
 岩 島 雄 步
 後 藤 梅 志
 小 池 し げ お
 竹 内 圭 三
 山 崎 帆 加 夫

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

注 文 (十句) 清水白柳子選
 クイズ (十句) 弘津 柳慶選
 (六月廿日締切)
 弁 当 (十句) 中島生々庵選
 手 紙 (十句) 大鶴 喜由選
 (七月廿日締切)

毎號募集

近作柳樹雜詠廿句 麻生路郎選
 川柳塔 (雜詠) 麻生路郎選
 文章 (評論・研究・感想其他)
 (毎月廿日締切)

投稿規定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
 ▼ 『近作柳樹』は一般作家の雑吟を募る。
 ▼ 『課題吟』は何人でも投句が出来る。
 ▼ 『川柳塔』への投句は不朽洞會員に限る。

川柳雜誌

第八卷 第六号

B列5号 毎月一回一日発行
 定 価 四〇円
 送料 (四円)

(敬請禁) 半ヶ年 二六四円
 一ヶ年 五二八円
 昭和廿八年五月廿五日印刷
 昭和廿八年六月一日発行

大坂市住吉區西四丁五丁目二五番地
 行 經 理 人 麻 生 幸 二 郎
 編 輯 兼 發 行 所 川 柳 雜 誌 社

大坂市住吉區西四丁五丁目二五番地
 發 行 所 川 柳 雜 誌 社
 郵 政 口 座 大 阪 一 五 〇 五 〇

THE SENRYU ZASSHI

NO. 313

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

避妊には..
ゼリー剤を!



★溶ける時間がいらず速効且つ確実で連用しても無害
★注入器で深部へ送るから、タンポンに塗り御使用を!

サンシー

1 姫 2 太郎 3 サンシー

とつと速く とつと便利に!
とのお期待に應えて

名古屋ー大阪 特急 2時間55分

名古屋発 6:00 7:00 8:00 9:00
大阪上六発 9:00 10:00 11:00 12:00

普通急行はこのほか60分ごと運轉

近畿日本鉄道

アイスクリームは
堅牢で衛生的な
この容器で



酒販用紙コップ 食堂用紙製品一切

特殊紙器工業株式會社
フタバカツブ株式會社
大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話 天下本局 2312・2303

大阪名菓
もなか民かまご
源氏の最中

百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九

民かまご本舗
電話 三四〇九